松苓会創設85周年

二松學舍

松苓会報

CONTENTS

挨拶・祝辞 …… 1
松苓会 85 年の歩み …… 4
支部活動の状況 …… 10
母校の思い出 …… 23
編集後記 …… 39

特集号 SPECIAL ISSUE No.55

挨拶

二松學舍松苓会
会長
廣田 克己

昭和6年、二松學舍専門学校第1期生の卒業とともに同窓会「二松學舍松苓会」(以下「松苓会」)が創設されました。その「松苓会」が本年、創設85年を迎えました。これを機に初めて松苓会として周年事業を行えることを会員の皆様とともに喜びたいと思います。

母校は明治10年に三島中洲師が九段の現在の地に漢学塾を開かれてから139年の歴史を刻み、明治・大正・昭和・平成と有為の人材を多数輩出し続けてまいりました。

「漢学塾二松學舍」が、昭和3年、学制に則った旧制の「二松學舍専門学校」として第一歩を踏み出し、その後、4年制の専門学校への移行期を経て、昭和24年には国文学科と中国文学科の2学科からなる文学部の単科大学「二松學舍大学」になりました。さらに、平成3年に国際政治経済学部を増設して、2学部からなる総合大学となって今日に至っています。

松苓会が周年事業を行えるのも母校が幾多の困難を乗り越えて現在のように発展しているからにほかなりません。松苓会の周年を祝すと同時に母校の繁栄を喜びたいと思います。

さて、松苓会の創設の目的「本会は、母校建学の精神に基づき、会員相互の親睦を図り、思想学術の向上に資し、併せて母校の発展を期することを目的とする。」(現会則の3条)は、創設以来不変のものです。85年の歴史には様々なことがあったと思いますが、それを乗り越えて今日があるのは、母校を愛し、この目的をひたすら守り通した先輩諸氏の献身的な努力があったからだと思います。

現在、松苓会の運営が安定的に進められ、このような周年事業が行えるのも、先輩たちの努力や母校の好意による終身会費一括代理徴収制度の導入(平成14年度から)による財政基盤の確立にあります。松苓会の歴史を振り返るとき、これは創設以来画期的なことでした。しかし、創設時155人の卒業生で始まった「松苓会」が、現在では卒業者数が2万8千人を超えております。各都道府県に支部を置いておりますが、近年は大学入学者、卒業者が首都圏出身者で占める割合が8割以上にもなっており、支部組織維持の上でも工夫する必要に迫られております。また、終身会費納入者に応えるためにも組織のあり方の検討など解決しなければならない課題は山積しています。「会員相互の親睦」を具現化する事業の在り方や母校支援の方法なども再検討する時期に来ているでしょう。

卒業生の母校に対する帰属意識が希薄になってきていると言われます。母校が単なる卒業大学としてだけではなく心から母校であるとの自覚となれるような働きかけも必要でしょう。

この85周年を契機に、松苓会の将来のあるべき姿を模索するため、私たちは、昨年の総会で基本問題検討委員会を設置し、課題解決に向けて取り組むことといたしました。その基本となるのは、会則に定められた松苓会の「目的」をたえず意識しながら進めていくことにあると考えています。

『松苓会報』52号に掲載された東京大空襲で焦土と化した校地の瓦礫の中に母校「二松學舍」の看板を立てる先輩たちの写真を見た時の感動は今も鮮やかです。そして、その思いを変わることなく伝え続けなければと思います。「同窓会は母校の最後の砦」と言われます。「最後の砦」となれるよう、母校の末永い発展のためにもお力添えをお願いします。

最後に、節目としての85周年記念事業実施に当たり、多大なるご支援を頂いている学校法人二松學舍、二松學舍大学に厚くお礼申し上げます。

祝辞

学校法人二松學舍
理事長
水戸 英則

二松學舍松苓会が創立85周年を迎えられますことを、心よりお祝い申し上げます。

二松學舍松苓会は、昭和6年に「二松學舍専門学校松苓会」として卒業生155名で発足し、現在の会員数は2万8000人を超えております。「松苓」という名は時の専門学校長である山田準校長が創立者三島中洲先生の七言絶句「茯苓ヲ多産シテ世ノ弊ヲ医ヤス」の「茯苓」と二松學舍の「松」を掛け命名したとされており、爾来、二松學舍の卒業生は、山田校長が唱えた「社会の中堅として、一世の木鐸となり、時弊を医正し国家擁護する人中の茯苓でなくてはならぬ」を教訓として教育界を始めとして多くの分野で活躍をしております。

発足当時の会則を見ますと、第2条に「本会ハ会員相互ノ親睦ヲ図リ思想学術ノ向上ニ資シ併セテ母校ノ発展ヲ以テ目的トス」とあり、本学卒業生の親睦と学問の向上及び母校の発展を目的とした歴史ある同窓会であることが判ります。今日まで母校発展のため多大なるご支援ご協力を頂いておりますが、これも偏に、歴代そして現在の役員、会員の皆様方、そして、事務局のたゆまぬご努力の賜物であり、現在でも、母校支援事業及び在学生支援事業として、教育研究振興資金に毎年100万円の浄財をご寄付戴いている他、「論語の学校」、「漢詩コンクール」、「教育研究大会」への後援、更には、在学生への奨学金の貸与、課外活動に対する顕彰、二松學舍祭への助成等多くのご支援を賜っていることは、大変有難く深く感謝申し上げる次第です。

さて、本学を取り巻く環境は、年を追って厳しさを増しております。少子化の進展による18歳人口の減少、都心部での学生獲得競争の激化、加えて平成31年度スタート予定の「実践的な職業人を養成する大学構想」、更に地方創生事業に伴う地方大学の優遇化措置など諸方面からひしひしとその強まりをみせております。こうした中、本学の進むべき道は、創立135周年に公表した長期プランN2020PLANに示しましたが、教育の質的改善を通じた大学のブランド力の引き上げ、学部4年間で真の実力をつけるための教育の展開、また、両学部での英語、中国語等語学力の強化やキャリア教育等の諸改革、両学部の学科改組など根幹の諸改革をスピーディーに推進することが重要と考えており、その一環として平成29年4月には、文学部に新たな学科として「都市文化デザイン学科」を開設いたします。入学定員は50名、国内外の都市文化や歴史を正しく理解し、「表現力」「編集力」「読解力」「企画力」を備え、その魅力を世界に発信できる人材の育成を目指します。一方、国際政治経済学部にあっては、平成30年4月の開講を目指し、現在、出口を意識した学部改編に向けた検討に入っていることをお知らせいたします。

本学は、来年の10月には創立140周年を迎えます。「いままでの140年、これからの140年」を基本テーマとして、建学の精神と教育研究の基本方針を再確認し、中洲先生が唱えた「東洋の精神による人格の陶冶」に基づき、「自ら判断し、行動する豊かな人間力」を備えた人材を育成することを目標として諸改革に取り組みます。受験生や在学生を含む全てのステークホルダーから魅力ある大学として評価されるよう邁進する所存でございますので、今後も変わらぬご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、この記念すべき創立85周年を新たな出発点として、廣田会長を中心にさらに結束を深められ、二松學舍松苓会の益々のご発展と会員各位のご健勝を祈念して祝辞といたします。

祝辞

二松學舍大学
学長
菅原 淳子

二松學舍大学の同窓会である松苓会の創立85年を祝し、心よりお慶び申し上げます。さて、本学は来年、創立140周年を迎えますが、今日まで伝統をしっかり守ってこられましたのは、卒業生に支えていただいた御蔭と存じております。また松苓会の皆様には、日頃より学生の教育・学習支援をはじめ、学生募集、大学運営等様々な点でご支援・ご協力を賜り、改めてお礼申し上げます。

二松學舍大学は、前身である二松學舍専門学校時代から合わせて、約2万8千名の卒業生を社会に送り出して参りました。中等学校の国語・漢文科教員の養成を目的としていた専門学校時代以来、教員養成の伝統は今日まで受け継がれてきておりますのも、ひとえに、卒業生の皆様の教育界におけるご貢献の賜物であると存じております。また国際化が進む中で、平成3年に国際政治経済学部を開設した後は、公務員や一般企業に進む卒業生も増えて参りました。

10年ほど前から秋の学園祭に合わせてホームカミング・デイを松苓会と大学で共同開催し、卒業生の皆さまに懐かしい先生方や友人との再会の場を提供して参りましたが、本年2月には新たに本学では名刺交換会という形で異業種交流会を開催し、ビジネスの世界で活躍されている卒業生のネットワーク作りにも着手いたしました。

今日、国際社会ではグローバル化や多様化が進展し、日本の高等教育も質的転換を求められ、加えて日本では少子化が進み、18歳人口が急激に減少していることで、私立大学においては学生募集が大きな課題となっております。そこで変化する社会のニーズに応え、今後も安定的に学生を確保していくことを目指して、文学部では新たに都市文化デザイン学科を平成29年4月に新設することになりました。また、国際政治経済学部でも改組に向けての取り組みが始まっております。伝統を維持しながら新しい風を入れ、教育のさらなる充実をはかって、これからも質の高い教育を提供して参ります。

松苓会の皆様にもいっそうのご理解とご協力を賜りたく、よろしくお願い申し上げます。

祝辞

二松學舍松苓会
前会長
神津 賢一郎

松苓会創設85周年おめでとうございます。

平成25年の松苓会総会において、3年後の平成28年には二松學舍松苓会が発足してより85年を迎えるので記念事業を行いたいと発表。さっそく小林幹事長が資料の蒐集、精査し、「松苓会の歩み」を松苓会報49号から連載。目を見張るような貴重な資料である。会報50号は戦中の記事。当時は中等教育から大学に至るまで、軍部から将校が配属され軍事教練を行なっていた。「戦死すれば靖国神社で神様として祀られ、大変名誉なことである」と言われた時代。

昭和18年、学徒出陣、二松學舍の学生が入隊のため学窓を離れるとき、「靖国神社で会いましょう」と挨拶すると、学長那智先生が強い口調で「そういうことを言ってはいけない。死なずに必ず生きて帰りなさい」とおっしゃった那智先生の言葉に私は深く心打たれました。当時、国策に反したことを口にすると国賊と言われた時代。改めて那智先生の偉大さをこの記事により感じた次第である。

さて松苓会報49号の巻頭挨拶文に私は「節目は発展の原動力」と述べました。大学は節目ごとに将来を見据えて発展してきた。松苓会も節目を大切にし、過去の歴史を振り返り将来を見据えて、発展の道を探って行かねばと思う。

ところで大学の沿革史は随所に見ることが出来るけれど、松苓会にはそれがない。私は何としても松苓会の沿革が、誰でもすぐわかるようにしなければと、かねがね思っていました。その夢がやっとかなえられたという思いで、この85周年の記念行事を心待ちにしておりました。松苓会が発足してより、初めての記念行事実現のために準備を押し進めてきた本部役員、記念事業実行委員会皆様の御労苦に対し、心より感謝と御礼を申し上げます。有難うございました。

これを機に松苓会の益々の発展と二松學舍大学の発展をお祈り申し上げます。

「松苓会」の名称の由来

機関誌『松苓』創刊号に、初代会長山田準は「松苓会」のいわれを記している。

松下伝経四十歳
一朝何幸浴恩恵
垂枯老樹再繁栄
多産茯苓医世弊

柏校舎前庭の「忠孝碑」
（昭和61年 復刻再建）

忠孝碑（賜金紀恩碑）碑文

此は大正天皇御即位と共に、多年御侍講申上げた三島先生に二松學舍費として御下賜金があつたのを、先生が感激して作られた七絶である。当時枯死せんとした二松は再び繁栄し、専門学校が創設せられたと共に三たび繁栄した。そして本校より社会へと巣立った卒業諸子は茯苓である。世弊を済ふべく使命づけられた茯苓である。

茯苓は和名マツホドという、松根に生ずる菌類である。「松脂滴入地　千歳則為茯苓」といはれ、又、長生を資け疾病を治すといはれ、漢医の宝薬である。卒業諸子は社会の中堅として、一世の木鐸として、時弊を医正し国家擁護する人中の茯苓でなくてはならぬ。余が敢て松苓の字を本会に冠すべく助言した微意は茲にあるのである。

松脂が地に入つて茯苓となるには千年を要す。大器は晩成す。卒業諸子は持重真修して、山路にごろごろして居る松毬とならず、地中千年の茯苓となれ。是れ諸子が忠孝碑銘に負ふ所の使命である。

松苓会 85年の歩み

明治10年10月　中洲三島毅、二松學舍を創立。

大正8年5月　三島毅、三番町の自宅で死去。享年90歳。

昭和3年4月　二松學舍専門学校開校。校長は山田準。

昭和6年3月　二松學舍専門学校第1回生卒業。卒業者数155人。

創立者　三島中洲
（1830～1919）

8月　「二松學舍専門学校松苓会」第1回総会開催。初代会長に山田準校長就任。

松苓会創設の目的は、会則第2条に「会員相互の親睦を図り思想学術の向上に資し併せて母校の発展を期する」とあり、第9条には「相互並びに後輩に対し就職その他に関し便宜を計ること」とある。会長は「母校校長を推戴」。卒業回数毎に会長が委員を任命、委員の互選によって幹事を選出。幹事が会務を執り行う取り決めであった。

9月　満州事変起こる。

昭和7年　機関誌『松苓』創刊。以後『松苓』は毎年発行され、第10号（昭和18年10月）までの発行が確認されている。

松苓　第1号

5月　5・15事件　犬養毅首相（二松學舍顧問）暗殺される。

昭和8年5月　中洲先生銅像除幕式挙行。『松苓』第3号には「銅像は胸像で、玄関に向かつて右に建てられた。今後我等は先生の謦咳に接し得なかつたけれどその温容に接し得られることはうれしいことである。」と記されている。

昭和9年5月　満州新京「大和ホテル」に於いて「在満松門会」の第1回会合

開催。会則に「本会ハ満洲ニ在住スル二松學舍専門学校卒業生二松學舍出身者並関係者相互ノ連絡親睦ヲ図リ二松學舍専門学校松苓会及ビ中洲会ノ目的達成ヲ期スルモノトス」とある。昒和14年7月発行の『二松』第22号には、会員数が特別会員4名、通常会員（専門学校1回～9回）40名。

昭和12年9月　二松學舍創立60周年及び専門学校設立10周年を祝賀し、丸ノ内報知新聞社講堂で松苓会主催の「二松の夕」を開催。参加者千人。収益金を支那事変皇軍慰問金として献金。

昭和13年4月　在学生、卒業生の応召。

「四月十八日　第一学年生徒北村元美君応召のため第三時限に全校生徒第三教室に於て歓送会開催。第五回卒業生西和夫君応召二十日午後三時東京駅出発の旨通告あり。十九日　北村元美君午前九時東京駅出発に付山田校長外全校生徒見送る。二十日　西和夫君東京駅出発山田校長、今主事松苓会員見送る」（『二松』第20号）。

9月　「九月三日　本校卒業生及在校生ノ支那事変応召者十四氏へ国分理事長山田校長ヨリ慰問品ヲ贈呈」（『二松』第21号）。

昭和14年　「本校出身の左の二氏は今事変に於て壮烈無比なる戦死を遂げられ護国の鬼と化せられた。ここにその赫々たる不滅の御武勲をしのびまつると同時に謹んで哀悼の意を表したてまつる。第一回卒業生　宮崎寿治氏　第二回卒業生　山縣（旧姓板倉）進氏」（『二松』第21号）。

この年、『松苓会会員名簿』発行。名簿は昒和19年頃まで毎年発行される。それまでは『松苓』に会員名簿を併載している。名簿の発行により、年1回の総会開催、機関誌『松苓』、『会員名簿』の発行が松苓会の事業として定着する。

昭和16年12月　太平洋戦争勃発。

昭和17年9月　第12回生3カ月繰り上げ卒業。第13回生6カ月繰り上げ卒業。

軍事教練・北富士演習

昭和18年4月　繰り上げ卒業は昒和20年（第16回生）まで続く。

10月　二松學舍専門学校長に那智佐伝（第2代松苓会長）就任。出陣学徒壮行会が明治神宮外苑競技場で行われ、二松學舍専門学校生徒も参加。

昭和20年3月　戦災により校舎全焼。仮校舎での授業となる。富士見町の日本歯科医専門学校、5月代々木本町の基督教会、昒和21年1月には富ヶ谷町の名教中学に移る。

戦災の状況が『中洲会誌』（復刊第1号　昒和24年10月発行）に次のように出ている。

一　焼失の日時　昒和二十年三月十日午前一時

二　焼失物件　恩賜講堂教室四　理事室一　事務室一　剣道柔道場一棟　校長住宅一棟　教授住宅一棟　炊事屋一棟　中洲先生銅像一座　図書室備付書籍　凡二千巻

三　残留物件　書庫一室　学籍簿全部　庭前銅像一基　金庫一

四　焼失の状況及其他　焼夷弾数十校内に投下せしを以て、忽ち燃上がり、加ふるに西北風烈しく、防空要員十数名ポンプを以て水を注ぎ極力防火に勉めしも、到底及ぶこと能はず。僅に学籍簿を持出のみに止まり、残念にも大部分烏有に帰しぬ。

昭和20年8月　終戦。

昭和22年10月　校舎再建の募金活動、同学校債引受け募集活動が行われる。仮校舎の名教中学校から三番町の新築校舎に移る。

11月　二松學舍創立70周年記念式並びに新校舎落成式が行われる。

12月　二松學舍専門学校長に塩田良平（第3代松苓会長）就任。

昭和23年　近畿支部、岡山県支部発足。

昭和24年4月　二松學舍専門学校は二松學舍大学に移行。学長塩田良平。

8月　会則を改正し、「二松學舍専門学校松苓会」は「二松學舍大学松苓会」に名称変更。第4代会長に石川梅次郎（1回卒）就任。

昭和25年3月　二松學舍大学の名称を東京文科大学に変更。昭和28年に二松學舍大学に戻る。

昭和26年2月　二松學舍大学学長事務取扱いに那智佐伝就任。

昭和28年3月　二松學舍大学の第1回生卒業（専門学校から通算21回生）。

昭和29年8月　戦後途絶えていた松苓会総会を母校で開催。

昭和30年6月　衆議院文教委員会で「二松學舍大学事件」を審議。

9月　大学内の混乱収拾のため臨時評議員会が開催され、理事長を罷免。

10月　新理事会発足。理事長に那智佐伝就任。

昭和32年12月　創立90周年事業校舎増築募金活動。

昭和33年12月　『二松學舍大学新聞』創刊。松苓会の記事掲載始まる。

昭和34年1月　松苓会互礼会（委員会を兼ねた）開催（毎年1月7日に開催していることが大学新聞に掲載されている）。

8月　松苓会委員会で第5代会長に浦野匡彦（2回卒。常任理事。昭和37年に理事長）選任。

昭和34年　この頃から松苓会入会金制度（入学時に徴収）導入。昭和34年度は200円。

松苓会の運営は、会員の会費で行われている。会則によれば、創設当時（昭和7年）の会費は年額50銭で卒業の際2年分を納入する。昭和13年には6円とし、全額納入した者は終身会員とする（卒業年度に全額月賦前納）。昭和18年には20円とし、全額納入した者は終身会員とする（卒業年度に全額納入）。昭和24年には年額200円となっている。しかし、会則ではこのようになっているが、納入状況は悪く、創設時から運営に苦慮していることが『松苓』に記されている。

昭和37年5月　二松學舍大学学長に加藤常賢文学部長就任。

昭和41年　松苓会入会金500円。

昭和42年8月　都道府県支部長会議を大学で開催。松苓会の名称を「二松學舍松苓会」に改称。

昭和43年　この年度から大学の父兄懇談会を全国各地で開催（昭和50年まで）、松苓会都道府県支部長が出席し、支部での卒業生の活躍等を説明。

昭和45年　「松苓会組織強化について」の文書を浦野匡彦会長名で送付。

昭和50年1月　二松學舍創立百周年記念事業実行委員会発足。実行委員及び地方委員に松苓会支部長等が加わる。

4月　二松學舍大学学長に浦野匡彦（理事長・松苓会長）就任。

8月　松苓会支部長会議を九段会館で開催。二松學舍創立百周年記念事業について協議。

昭和51年8月　二松學舍創立百周年記念事業実行委員会を九段会館で開催。全国23の地方支部代表も参加。

この年、松苓会費改定。会費は年額千五百円。60歳以上の終身会費は五千円（据置）。

昭和52年10月　二松學舍創立百周年記念式典挙行。

昭和53年3月　大学卒業式に卒業後25年を迎えた第21回卒業生を招待。以後毎年招待。昭和55年度の卒業式からは卒業後50年を迎えた専門学校卒業生を招待。卒業式後に松苓会主催の慶祝会を開催。

昭和55年2月　支部長会議を開催。

昭和57年3月　『茯苓』第1号（二松學舍専門学校第1期生回想録）発行。

昭和56年度卒業証書授与式を九段会館大ホールで挙行（第50回生）。

100周年記念式典

この年からこれまで大学の講堂で行われていた卒業式は、平成23年3月の東日本大震災で九段会館ホールの天井が崩落し使用できなくなるまで九段会館で行われる。

専門学校当時の卒業式は、15回生までは校舎2階の「恩賜講堂」で挙行されている。昭和20年の校舎焼失後は、16回生（昭和20年9月卒）は卒業式は行われず、17回生は仮校舎の名教中学校で、18回生が焼跡に建った新築校舎で行われている。昭和40年、41年3月の卒業式は校舎改築のため、東條会館で行っているが、昭和42年からは5階建て校舎の5階講堂（505教室）で、昭和57年3月から九段会館での挙行となった。

卒業式（昭和58年度）

「恩賜講堂」大正8年12月落成の校舎2階の講堂。大正7年当時の渋沢栄一二松義会会長を通じて金5千円を下賜され、この御下賜金を講堂の建築費に充てたことから名付けられた。

昭和58年

4月 大学沼南校舎で1、2年生の一般教育課程の授業を開始。

昭和61年

8月 この年、大学千代田校舎内に松苓会室が設けられる。

全国支部長会議を九段会館で開催。創立110周年記念事業の推進事項を協議。

昭和62年

3月 大学沼南校舎前庭に戦災で焼損した「忠孝碑」（賜金紀恩碑）を復刻建立。

11月 浦野匡彦理事長・学長・松苓会長逝去。

12月 二松學舍大学学長に佐古純一郎教授就任。

この年度の松苓会費は、年額千五百円、60歳以上の終身会費は一万円。

7月 幹事会を千代田校舎食堂で開催し、浦野会長逝去に伴い第6代会長に池田松郎（2回卒。理事長）を選出。

全国支部長会議を開催。

9月 浦野匡彦先生銅像・詩碑の除幕式が沼南校地で行われる。

10月 二松學舍創立百十周年記念式典挙行。

『浦野匡彦言論集』（発行は松苓会）刊行。

浦野匡彦先生銅像

12月 『二松學舍松苓会報』創刊号発行。

昭和63年

9月 幹事会・支部長会議を私学会館で開催。第7代会長に小池良雄（11回卒。理事長）を選出。大学生の入会金を3千円から5千円に改定。支部助成として支部報発行支部に年間2万円支給することを決定（実施は平成元年度から）。

平成元年

7月 二松學舍大学学長に伊藤漱平教授就任。

幹事会・支部長会議をホテルグランドパレスで開催。

平成2年

8月 幹事会・支部長会議を私学会館で開催。

10月 『浦野匡彦伝』（発行は松苓会）を刊行。

平成3年

4月 国際政治経済学部開設。

6月 国際政治経済学部開設記念祝賀会が沼南校舎で行われ松苓会が贈ったアメリカハナミズキ2本の記念植樹が2号館玄関前で行われた。

スクールバス

7月 幹事会・支部長会議が私学会館で開催され、第8代会長に下河部得三（4回卒）を選任。

これまで学校法人の理事長が松苓会会長に就任していたが初めて学外から会長に就任。この体制は現在まで続いている。

平成4年

この年度から、松苓会費納入促進運動を始める。

平成5年

4月 二松學舍大学学長に雨海博洋教授就任。

平成5年頃の沼南校舎

平成6年7月　二松學舍大学父母会が設立され、父母会主催の地区別父母懇談会が各地で行われる。

平成7年7月　松苓会総会を日本出版クラブ会館で開催。会則の全部改正案が承認される。施行は7年4月。

飯田橋会館で総会開催。会則全面改定をうけた松苓会細則を制定。会費の抜本策が図られるまでの暫定措置として、総会を隔年開催することを決定。総会のない年度は幹事会開催で代える。

会費等検討委員会の設置、法人側との連絡協議会設置を決定。

平成8年5月　幹事会（総会を兼ねる）を千代田校舎会議室で開催。下河部会長病気療養のため、武田祈副会長を会長代行とする。

平成9年3月　平成8年度卒業予定者に松苓会費の5年分一括納入のお願い文書を送付。このお願いは平成13年度の卒業生まで継続。

終身会費制度導入等について松苓会役員と学生代表との話し合いが行われる。

4月　二松學舍大学学長に清水義昭教授就任。

8月　総会をアルカディア市ヶ谷（私学会館）で開催。下河部会長辞任に伴い、第9代会長に武田祈（11回卒）を選出。総会後、清水義昭、雨海博洋の新旧学長歓送迎会開催。

10月　二松學舍創立120周年記念式典挙行。

平成10年8月　近畿支部創設50周年を祝う会（大阪市内）開催。

平成11年8月　総会をアルカディア市ヶ谷（私学会館）で開催。終身会費の一括代理徴収、及び附属高等学校同窓会の分離独立に伴う会則・細則の改正を承認。

懸案だった終身会費の一括代理徴収が学校法人、大学側との協議により実現した。これによって松苓会の財政基盤が確立し各種の事業が出来るようになった。実施は、平成11年度入学生から。

8月　附属高校卒業生は、昭和23年の同校創立以来松苓会の組織に組み込まれていた。附属高等学校卒業生からの要望があり、平成10年に高校同窓会が設立されたのをうけて、松苓会会則上での規定整備が行われた。

総会後に、石川梅次郎先生卒寿慶賀の会が開催される。

平成12年　この年、前年9月就任の石川忠久理事長の講演会、及び大学主催の「卒業生との懇談会」（大学説明会）が全国各地で開催される（「卒業生との懇談会」は平成18年度まで開催）。

平成13年3月　松苓会活性化委員会（第一次）発足。

4月　二松學舍大学学長に石川忠久教授就任。

12月　校舎新築のため取壊される千代田校舎とのお別れ会が、大学と松苓会共催で地下1階学生食堂を会場として開催。参加者216人。

建て替え前の千代田校舎

平成14年3月　大学千代田校舎建て替えのため松苓会室は柏沼南キャンパス附属沼南高校南校舎2階に移る。新校舎落成までの2年間、大学学部の授業はすべて沼南校舎で、大学院の授業は湯島仮校舎（湯島聖堂敷地内）で行われた。

平成15年4月　平成14年度卒業生の終身会費が学校法人から振り込まれる。（終身会費の一括代理徴収開始。以後毎年、当該年度分が3月末日までに振り込まれている。）

平成16年3月　九段新校舎（千代田校舎の名称変更）竣工。松苓会室が新校舎1号館11階に設けられる。

7月　松苓会定期総会を九段新校舎11階会議室で開催。松苓会奨学金を創設。

8月　九段新校舎落成卒業生祝賀会を大学と松苓会共催で開催。式典を中洲記念講堂で、懇親会を13階ラウンジで実施。参加者146人。併せて卒業生・在学生の合同作品展を地下3階展示ホールで7月26日から8月1日まで開催。

平成17年4月 二松學舍大学学長に今西幹一教授就任。

8月 第1回二松學舍大学ホームカミングデーを開催（大学と松苓会の共催）。143人参加。午前11時から中洲記念講堂において前学長石川忠久名誉教授の「漢詩の味わい方―大正天皇・貞明皇后と三島中洲―」の講演に続き、開会式では今西幹一学長、佐藤保理事長、武田祈松苓会長の挨拶があり、校歌斉唱の後、会場を13階ラウンジに移して懇親会が行われた。併せて7月30日から8月7日まで卒業生と在学生の合同作品展が開催された。ホームカミングデーは平成22年の第6回までは毎年8月第1日曜日に、平成23年度からは大学学園祭に合わせ11月に開催（平成27年は大学校舎の改装等により12月に開催）している。

第1回ホームカミングデー

平成19年8月 第12回定期総会を九段校舎11階会議室で開催。役員改選があり、第10代会長に神津賢一郎（27回卒）選出。学校法人二松學舎寄附行為の変更に伴う松苓会推薦の評議員候補者3人を選出、9月1日就任（同日に評議員会開催）。

休刊していた『茯苓』の第9号（第13回～第20回卒業生の回想録）を発行。

平成21年4月 二松學舎大学学長に渡辺和則教授就任。

6月 第14回定期総会は、例年の7月末～8月開催を変更して6月開催となる。

平成22年12月 松苓会活性化委員会（第2次）発足。

平成23年3月 東日本大震災発生。

岩手県支部では支部会員の被災状況等把握のための活動を早期に開始、同窓生を勇気づけた。後に『二松學舎松苓会岩手県支部報「翰」東日本大震災関連号保存版』（平成25年12月刊行）にまとめる。松苓会本部では、震災の義援金募金を各支部に依頼、また大学内に募金箱を設置する。寄せられた義援金は、被災された本学学生17人に見舞金として支給。

この震災により、平成22年度卒業式は中止となり、大学内の教室等でゼミナール担当教員が卒業証書学位記を伝達する。

11月 国際政治経済学部設立20周年記念卒業生交流会が中洲記念講堂で開催され、神津賢一郎会長出席、挨拶を述べる。

平成24年3月 大学の卒業式が新宿文化センター大ホールで挙行される。

長年使用してきた九段会館での挙行はできず、平成25年は港区のメルパルクホールで、平成26年からは中野サンプラザホールで行っている。

5月 二松學舎創立135周年事業として創立者三島中洲忌墓参の会が行われ、松苓会から神津会長以下本部役員が参加（冨士霊園）。

10月 二松學舎創立135周年記念式典挙行。

平成25年6月 第18回定期総会を九段校舎11階会議室で開催。平成13年度以前の卒業生の終身会費を一律1万円とすることを承認。平成28年に迎える松苓会創設85周年記念事業を実行委員会を組織して取り組むことを発表。活性化委員会の答申が報告される。

活性化委員会の答申を受けて、平成13年度以前に卒業された会員の終身会費手続き、松苓会寄附金募金活動等を推進。

平成26年6月 第19回定期総会開催。この総会で、学校法人二松學舎の内部監査（平成24年度に監査を受ける）で指摘された規程整備のうち「松苓会慶弔等規程」「松苓会旅費規程」を制定。

平成27年4月 二松學舎大学学長に菅原淳子教授就任。

6月 第20回定期総会開催。役員改選が行われ、第11代会長に廣田克己（38回卒）選出。

「松苓会都道府県支部に関する規程」制定。基本問題検討委員会の設置を承認。

平成28年6月 二松學舎松苓会創設85周年記念式典挙行。

支部活動の状況

松苓会は昭和6年の創設時に地方支部設置を想定した会則を制定している。昭和24年の「松苓会名簿」には、8つの支部名が記されており、昭和34年10月発行の「大学新聞」は全国46都道府県の支部長または委員名を掲載している（福井県を除く）。この頃から支部のない地方には本部が支部長を委嘱し支部組織の働きかけが始まった。平成3年の本部組織の衣替え、続く会則の見直し等があり、支部助成等も始まった。

今回85周年特集号の発行に当たり、各支部の支部長に支部の現況等についてご執筆願った。

北海道支部

支部長　増井義昭（文39）

北海道支部の現況

松苓会北海道支部の始まりは、1970年代の始め、毎年1月に行われる高校教師の研究会（高教研）時期に合わせて、新年会が行われていた事がその始まりとされています。それ迄にも道南（函館）、道東（釧路）などでは地域的に集りが行われていた様で有ります。

1980年代には、数年に一度開かれる程度と低迷をしておりましたが、平成4年に組織体制を建て直して再出発をいたしました。

大学側からの卒業生の住所等の提供を受けた事が大きく、又高校教師の住所、勤務校などの情報が得られたのは何よりでした。現在の様に個人情報保護の認識が強く無かった事が幸いでした。翌年平成5年の新年会には、27名の参加者を得られ、会報の発行や、規約等、新体制が固められました。その後、道南分会（函館）、道東分会（北見・釧路・帯広）、道北分会（旭川）と札幌以外、それぞれ三分会で会が開かれる様になり、札幌では、8月に総会、1月には新年会が定例で開催され、年5回、道内4箇所で会合が持たれる様になりました。会報も7月、12月の年2回発行され平成27年12月発行で52号を数える事となったので有ります。

しかし、会員数の減少には寂しいものが有ります。新しい卒業生の北海道転入の情報が極めて少なく、現在連絡の取り合える会員数が、170名程となっております。平成5年の新年会参加27名は今では夢の様で有りますが、松苓会の灯を消す事なく、先輩諸氏の心意気を繋いで行く事こそが、松苓会の発展に結びつくものと信じております。

札幌すすきの「おれの札幌」にて

▶父母懇談会で札幌を訪れた清水義昭学長を歓迎する会。講演で来札中の石川忠久教授も参加（平成10年7月）

青森県支部

支部長　柴垣博孝（文44）

支部活動の再開に向けて

青森県支部では活動のピークが過去2回ありました。それは昭和40年代と昭和の末から平成の初めにかけてのことでした。しかしその後現在に到るまでの四半世紀は支部としての活動は全く行われて来ませんでした。

とは言え、ここ数年このような現状を打開して県支部としての活動を改めて行っていこうという機運が醸成されて来ていたことも事実です。そこでこの度松苓会がめでたく85周年の節目を迎えるに当たり、この機会を契機にして支部活動を再開し継続していくべく有志の間で話し合いが持たれた結果、この8月上旬に支部総会・懇親会を開催し併せて会報も発行していくことになりました。ともかく毎年盆前に支部総会を開催し会員相互の親睦を図っていきたいと考えています。その上でこの会が会員相互の学びの場としても機能していくことができればこの上ないことだと思っています。

長きに渡って支部活動が低迷していた原因は偏にすべてのことを支部長お一人に任せきりにしてしまっていたということに尽きます。従ってこれからはこの教訓に鑑みてこの後県支部として3回目のピークを迎えてその活動を継続していくためにも支部の組織を確かなものにし、その組織に人的な面で息が通わせられるようにして地道に活動を継続していくことができるように道を付けて行きたいものだと考えております。

▶この写真は平成元年に、今は亡き柳町菊治郎先生(専2回2部)と神亮一先生(専8回)を囲んで、八戸グランドホテルにおいて松苓会を開催したときのものです。

平成元年　八戸グランドホテルにて

岩手県支部

支部長　宮本義孝(文32)

岩手県支部の現況

松苓会岩手県支部は、当時、県の教育委員長だった牟岐詰雄氏らが中心になって昭和50年に創設されました。

現在、160名ほどの会員がいます。

ただ、これは今後の課題になるかと思いますが、今、地方は教員や公務員の採用枠も少なく、安定した職場も十分でないため、大学を出ても卒業生は郷里に戻れずにいます。それで支部活動に係わる会員が平成15年以降、ほとんどおりません。

卒業生の一層の学力向上や地方における職場開拓が必要になるかと思います。

それから、支部活動では、創設以来、毎年7月第4日曜日に実施している総会、懇親会と会員名簿は、運営すべての基になるため年度当初ごと移動を確認し更新しています。

更に、会員相互の情報交換として会報は出来る限り発行するよう心掛け、この10年間で65号まで出しました。

その他、文学散歩、講演会、漢詩講習会、書道展なども考えているのですが、これは会員が少数なため、人集め、運営費捻出などでなかなか手がつけられずにいます。ただ県内では、それぞれ個人的に活躍している会員は結構いますから、支部としては呼び掛けや励ましで支援するようにしています。

何事も努力を重ねてかろうじて維持できるもの、これまで先輩たちが築いてきた活動を後退させることのないよう、がんばっています。

宮城県支部

支部長　千葉　仁(文27)

支部の現況について

会員数

現在支部会員数は、専門学校卒2名、文学部卒164名、国際政経卒16名、合計186名である。但し、平成25年以後の卒業生についてはデータがないので不明である。会員の動向等を把握できている会員はその半分程度である。その正確な把握・確認が課題である。「通信の不通、返答無し」という状況である。

支部の現状

本県支部の発足は昭和38年1月6日に初代支部長の椛澤直司(宮城県古川女子高校長)先生が県下の同窓の高校教員に働きかけ、研修と親睦を旨とした支部組織を結成された。

以後はその流れを踏襲して会員が順次確認され、名簿が作成され、国語教育の各種の研究活動に、同窓の誼を通じ、やがて小中学校、大学等の教職員を糾合し、同窓生一般にも及ぶ組織として今日に至っている。国際政治経済学部の卒業生数はまだ少ない。

支部総会等

発足以来回を重ねて22回に及び、特に平成18年以降は毎年開催しているという自負を持ちながら、反面に参加者の固定化による、発展性が乏しく、教職に就く若年の同窓生がごく少なくなり、組織そのものの将来性に危険信号が点っている。

国漢の二松學舍

教育界・書道界ではそれなりの人材が輩出して絶大なる評価を得ている。「国漢の二松學舍」のネームバリュウ(看板)が地方では希薄化すること自体を「大学の危機」でなければ、と杞憂している。

秋田県支部

支部長　三浦　基(文41)

秋田県支部の状況

秋田県支部は、記録によれば昭和40年代の初めに大学から石川梅次郎先生をお招きして支部総会を開催したのを皮切りに、大学の父母懇談会等が開催されるたびに総会を開催してきている。

平成に入ってからは毎年のように支部総会を開催している。

昨年の支部総会は、「松苓会名簿―秋田県」(平成24年7月20日)記載191名から、宛先不明返送を除く154名に案内を送付した。松苓会本部から「支部運営費」の助成を受け、開催できた。例年のホテルでの開催から居酒屋ふうの「炭火焼き」に変更した。出席者は9名であった。支部活動としては、年1回の総会開催、参加者の減少固定、事務局の多忙等から、活動の弱体化が実態である。そこで参加者協議の結果、支部役員交代、県北・中央・県南3地区に支部役員を置き、輪番で研修会を開催すること、支部総会は集まりやすさか

ら中央地区で担当することで了解した。今年度中に具体化し、来年度に引き継ぎたい。総会は、例年、8月第3または第5（大曲花火は第4）土曜日としている。年に一度、同窓の先輩、後輩が、過去に共有した時代と学びを語り、キャリアデザインを考え、今を互いに感じとる、そんな時を過ごしたいものだ。

なお、地元で開催される大学説明会には参加するよう会員に働きかけている。

支部長は、小野幸彦（1回）、小林繁春（10回）、野口養吉（17回）、高橋三男（34回）、佐藤寛（38回）と引き継ぎ、平成19年から私が支部長を務めている。

山形県支部

支部長　齋藤　裕（文38）

支部活動の活性化を

48歳で支部長を引き継いで20年経過した。多忙を口実に開催しないでいた支部総会を、地元の同窓生（教員、教え子）の協力を得て、退職間際にやっとのことで開催できた。それから毎年総会を重ねるうちに、支部の抱える課題も明らかになってきた。

最大の課題は総会への参加者をいかに増やすかである。これまで総会への参加者は、先輩の方や後輩、地元で教員になっている方、教え子がほとんどで、同窓生との語らいを楽しみに参加してくださる方は少ない。参加者が増えない要因として、①もともと山形県の同窓生が少ない上に、総会が開催されたのはここ10年くらいのことで、同窓生の結びつきが薄いこと、②県内全域から総会に参加するとなると、時間的、経済的な制約があること、③これまで国際政治経済学部卒業の方の参加がないこと、などが上げられる。

これまで、多くの方から参加していただこうと研修会を企画したり、支部報の充実を図ったり、高校生・市民を対象とした教養講座を主催したり、不十分ではあるが努力はしてきた。

これからは、仕事の都合や家庭の事情で総会に参加できない方も参加したくなるような立案、魅力ある支部づくりに、多くの同窓生の方の力をお借りして、まだ歴史の浅い当支部の活動を活性化し、支部長を後継に託したいと考えている。

鶴岡市での支部総会

▶平成23年7月9日、松田存副会長をお招きしての支部総会の記念写真です。ご夫婦で、子供さんを連れての参加もあり、和やかな雰囲気に包まれた総会でした。

群馬県支部

前支部長　新井喜義（文37）

群馬県支部の歩みと現況について

今から67年前、昭和24年に故浦野匡彦先生を初代の支部長として松苓会群馬県支部ができました。そして、現在、561名の会員がおり、内訳は、文学部が500名、国際政治経済学部が61名となっています。

また、事業として、年1回の総会と新年会を持ち、昭和59年からは、広報紙として「松苓群馬」を発行し現在に至っています。会報は、年1回発行、今年で45号になります。さらに、5年前から会員相互の親睦と二松學舍の名前を1人でも多くの人に知ってもらう意味も込めて「書展」を開いています。

また、かつての支部報を開いてみると、「書による歴史展」や「大学の見学ツアー」なども実施してきました。

第5回「群馬松苓会書展」（高崎シティーギャラリー）

松苓会が創設されて今年85周年になるそうですが、群馬県支部では継続こそ力なりという言葉を信じてここまでやってきました。しかし、会費の納入者数や行事への参加などを見ても一部の人だけにとどまっています。年に一度くらいは、同窓の人達が集まる場所に出て、旧交を温めて人脈をひろげることも、また悦しからずやと思いますが。

85周年を機に、もっともっと若い人たちが参加できる会を作っていかなければと考えています。

伊香保温泉「ホテル秀水園」にて

▶昭和59年8月25、26日に行われた総会に出席した会員の写真。前列右から3人目は故浦野匡彦先生。

埼玉県支部

支部長　町田哲夫（文42）

埼玉県支部の現況

松苓会埼玉県支部は、昭和57年、文学部25回卒の松田温昭氏を中心に組織されました。

以来35年、埼玉県支部は着実に歴史を重ねています。年に一度の総会・懇親会の開催ではありますが、母校への思いを胸に会員が集い、旧交を温め、年齢を超えた交流の場として定着しています。

定期的な開催は、39回卒木村誠次氏の支部長就任時代に始りました。当初木村氏は、無理な会員の勧誘はせず、会員相互の親睦を図ること、和やかな雰囲気を醸成することが組織拡大に繋がるのだと説かれていました。

平成21年3月の支部総会

現在、42回卒の私が前支部長の思いを引き継ぎ、現在の二松學舍大学の状況を伝える場、交流の場としての会であると共に新しい発見の場・出会いの場としての機能をプラスして活動の企画・運営にあたっています。総会開催にあたっては、会員の声を反映して、さいたま文学館での学芸員解説ツアー、小鹿野町の子ども歌舞伎の見学など、県内各地を巡る企画も進めているところです。

大学の九段集約に伴い、埼玉県内からの進学者は自宅からの通学可能圏内でもあり、高い割合を占めています。松苓会85周年を期に、更なる支部活動の充実に努めたいと考えます。

千葉県支部

支部長　辻　将一（文45）

松苓会千葉支部の活動

あれは、今から何年前のことであったでしょうか。確か大学を卒業した翌年か、翌々年の夏真っ盛り、場所も曖昧ではありますが、国鉄千葉駅前にあった千葉興業銀行2階の会議室だったと記憶しております。嘗て在学中に目を掛けて戴いた大沼秀紀先輩のたっての誘いでは断り切れず、初めて「松苓会千葉支部総会」に参加することになったのです。それが卒業生の集いであることは何となく承知していたものの、その場にお出でになった先輩方は、専門学校卒の方々ばかりの、しかも重鎮揃いです。

20歳代の出席者は小生のみで、ただ時の過ぎるのを只管待つのみ。正直、「何て場違いの所に来てしまったのだろう。」と後悔していました。その後、松苓会とは殆ど縁遠くなりました。

その後、今から20年程前、雨海博洋元学長の御発案、外郭団体としての「教育研究会」の発起人の1人に加えて戴き、どう言う因果か卒業後も今日に至るまで、母校二松學舍大学と繋がっております。些少なりとも母校への恩返しに為ればとの願いからです。

そんな折のちょうど12年前、大山德高元理事長により千葉支部の刷新、再出発の指揮を執って戴き、その甲斐あって現在の千葉支部の基盤がどうにか形になり得たのです。

小生も微力ながら、支部活動の活性化に寄与できたものと自負しております。その後、大山前支部長の後任として、その任を託されました。それは、異例の選挙によるものでした。人徳・力量・共に持ち合わせない小生にとっては、過度の重責と感じております。幸いにも、前田康晴副支部長を始め土屋誠前事務局長・田村喜夫前会計・藤本敏雄監査、その他大勢の会員の皆々様のお力添えがあったればこそ、どうにかこうにか今日の千葉支部の活性化に繋がっているのです。

衷心より皆々様に感謝申し上げます。本当に有難う御座いました。

松苓会千葉支部活動の当面の課題として、五つ掲げたいと思います。

①後輩への継承（世代交代）

②OGの多数の参加と人材登用

③国際政治経済学部卒業生の多数の参加と人材登用
④多種多様の業種に関わる卒業生相互の理解と交流
⑤後輩学生への支援

松苓会千葉支部の会員は、5000人を上回っております。南北約200キロ、東西約100キロの広大な面積を擁する全県一区が我が千葉県です。正直、負担も多く大変な思いもしておりますが、反面やり甲斐のある仕事でも在ります。是非是非、一人でも多くの皆様の御協力・御理解を御願い申し上げます。特に、20代・30代の方々が中心となって活動して戴けることが窮極の願いです。

どうか、お気軽にお声掛けしてください。お待ちしております。

平成27年度総会後の記念講演

東京都支部
支部長　矢澤喜成（文50）

多士済々の東京都支部

平成27年5月の支部総会より、井上和男前支部長（文42）の後を受けて、矢澤が支部長を御引き受けしております。木村正雄前々支部長（文25）・井上前支部長が推進して来られた支部活動の興隆に微力を竭くしたいと存じます。

扨、東京支部の役員は、星野優子副支部長（文42）を始め、多士済々であり、片山聖英幹事長（文50）、大渕俊明（文50）・渡辺大雄（文65）両幹事、中原敬二事務局長（文62）、畠山幸治常任幹事（文37）を筆頭とする10名の常任幹事等による強力な御助力を得て支部活動を運営出来ることは、身の幸いとする所です。また、平成27年には、平井領常任幹事（政13）を新たに御迎えする事が出来ました。

支部報の発行は年2回で、総会・講演会・懇親会を年1回、役員会を年5回開催しております。

東京支部が、現在力を入れているのが、星野・大山由美子（文47）両副支部長・高橋映子（文53）・原由来恵（文63）両常任幹事を中心として開催している女子会企画行事です。

第3回となる今回は、「目黒雅叙園と目黒周辺文学散歩」と銘打って、渡辺和則前学長を始め、20名の方々に御参加戴き、伝統の中華料理を堪能し、史跡散策で有意義な一時を過ごしました。

女子会企画のひとコマ・目黒不動尊

神奈川県支部
支部長　平野光治（文40）

神奈川県支部の現況

平成3年に「支部再建十周年録」が刊行され、歴代支部長のご努力と会員の皆様のご協力により支部事業が綿々と引き継がれています。年間の事業は7月会計監査、8月総会、10月文学歴史探訪、支部報発行、1月賀詞交歓会となっています。文学歴史探訪と賀詞交歓会は、県内6地区の地区長の皆様の輪番による開催となっています。松苓会本部の助成金は支部運営の大きな支えです。近年は松苓会本部、東京支部、千葉県支部、静岡県支部との絆を強くして各支部総会には相互に参加するなど交流を深めています。さらに、近県の松苓会支部との交流を考えております。総会案内等の送付は約300名で、県の卒業生の一割程度の状況です。会員数や会費納入者、事業参加者の減少が大きな課題となっています。魅力ある事業の実施や若い会員の参加をどう拡大していくかが支部活動継続のカギと考えております。そのような状況下での賛助会員の皆様の事業参加やご支援、ご協力は支部にとって大きな幸いです。多くの卒業生の思いに支えられて継続してきた神奈川県支部の歴史を大切にして、今後も努力していく所存です。なお、全国の支部活動を学んでいきたいと考えております。ご協力をお願いいたします。

平成27年の文学歴史探訪・小田原文学館

長野県支部

支部長　関　保典（文35）

長野県支部の今昔

終戦後間もない頃、戦前の専門学校で学ばれた方々が集い、二松學舍大学の長野県会のようなものができたと聞いている。町田英男・小林澄人・下条一利・矢嶋俊夫・西村満洲夫・嘉部益次先生等が発起人である。昭和33年1月5日には、石川梅次郎先生を迎えて、松苓会長野県支部総会を開催している。当時はガリ版刷りで会員名簿・開催通知・会議通知・支部報等を自費でなされていた。ご苦労を偲び感謝の気持ちでいっぱいになる。

私が関わったのは42年以降で、ガリ版刷りであった。事務局に関わった関係で二松學舍の長野県の全体像が見えてきた。長野県は北から南まで広い。総会にたくさんの出席者を得るには総会の開催場所を北信・東信・南信・中信と順番に移していこうということになり、やってみた。しかしすると、事務局がたいへんだということが解ってきた。

現在は総会を長野市で開催している。かつて、新年の名刺交換会も実施したこともあった。さらに二松學舍大学で蓼科に施設を持っていたのでそこでも教授を迎えて講演・懇親会等を実施したこともあった。現在は、総会8月と文学散歩9月と支部報の発行（平成27年度26号）と会員名簿発行と二松學舍大学の入学生募集説明会のお世話等を行っている。現在の課題は、長野県出身の二松學舍大学現役在学生と懇談する機会が持てないだろうかといつも話題になる。今後益々二松學舍大学松苓会長野県支部会員が増えて行くことを楽しみにしている。

新潟県支部

支部長　坂井福作（文42）

支部たより

暖冬と言われている中、寒波の襲来で全国的に雪が降り、奄美大島では115年ぶりの雪とのことでした。本県のような雪国では、スキー場が少雪で困っていたのが解消されたというニュースが流れています。

さて、本県支部では2年に1回支部総会を開催しています。今年はその支部総会を開催する年に当たっています。前回は本部からの支援もいただき長岡での開催でしたが、今年は副支部長とも相談しながら決めていきたいと思います。

支部長になってから、本県で開催される大学説明会には参加させていただいています。毎回、顔ぶれは違いますが高校に勤める卒業生も何人か参加しています。そこでは大学の先生からの講義を聞く機会が持てて、ひととき学生気分を味わうことが出来ます。また、現在の大学の状況等も知ることが出来、大変参考になります。

説明会は大学の主催ですが、支部としても応援しなければと思い、何人かの知り合いに連絡しています。そんなことから大学説明会を通して支部会員の交流の機会に出来ないものかと考えています。

国際政治経済学部が出来てから20年が経ちますが、本県における支部総会に参加していただけないのが残念です。今後の課題として、多くの同窓が集まるような総会を目指していきたいと考えています。（1月31日記）

富山県支部

支部長　小島貴雄（文47）

支部の現況

5年を周期として開催されているのが現状の富山県支部総会・懇親会ではありますが、前回は松苓会本部からの支援と大学側の大学説明会の当日開催という後押しを受け、平成25年7月に執り行なわれました。

総会ならびに懇親会には、渡辺和則学長、菅原淳子国際政治経済学部長（現学長）、廣田克己松苓会副会長（現会長）の列席を得て、大学の現状や求められる学生像、そしてアクションプラン等の説明を受けました。身近に魅力ある大学の存在を実感させていただきました。

平成25年7月の支部総会

支部の活性化に向けては、総会参加者が毎回ほぼ固定した少数である現状を打開するためにも、若い世代の参加、特に国際政治経済学部卒業生を含む清新な輪を拡げることの重要性が話し合われました。

同時に、それぞれが知り合いへの声かけを積極的に押し進めることを確認し合いました。

今後は、大学主催の講演会、あるいは高校生を対象とした講習会等の企画とタイアップし、新たな

学びの機会を設けることにより、時を隔てて九段の地に学んだ者同士が、一時ではありますが席を同じくして、地元の話題を含めた話の華を咲かせ、自己の研鑽と互いの絆を深め合う意義深い場を設けたいと思います。

他の支部の活動に比べ非常に脆弱ではありますが、北陸三県各支部間の連携と交流を足がかりに、近隣会員相互の親睦を深めていきたいとも思っております。

福井県支部

支部長　中道佳宏（文58）

福井県支部の現況

松苓会が創設され、活動を始めてから85年の歳月が流れたとお聞きした。私の人生と比較しても、はるかに超越した時間の経過であり、この間、本当にたくさんの方々がこの松苓会に関わり、会の発展のために尽力されたであろうことを思うと、諸先輩方のご尽力に対して敬意を表わさずにはいられない。同窓生として、心から喜びたいと思う。

さて、私が福井県支部長を務めることになったのは平成7年のことである。当時の支部長からの依頼で、右も左もわからない状況の中、支部長職を受けたわけである。今から思えば何と軽々しく受けてしまったことか…。

あれから約20年、名前だけの支部長として皆さんにご迷惑をかけ続けている。ただ、せめてもの救いは、一昨年の夏に松苓会福井県支部を立ち上げ、第1回支部総会を開催することができたことである。

平成26年8月3日、福井県小浜市の割ぽう雅に於いて開かれた支部総会には、本部から大地武雄先生をお迎えし、会員3名が集い、ささやかなスタートを切ったのである。

現在、福井県支部に所属している会員は25名。ただ、それまで集まって何かをするというような機会がもたれたことはなかった。今回の支部の立ち上げは、自分たちだけでは踏み出せなかった一歩である。

平成26年8月の第1回支部総会

規約を作る上においても、支部総会を開く上においても、他県の取り組みをお手本にさせていただいた。本部の方のご助言もあり、いいスタートを切ることができたのである。

今後は、継続した支部活動を行い、一歩一歩、着実に進んでいくことである。松苓会が90年、100年と記念の年を迎える時、福井県支部の歴史も確かな刻みを残していけるように努めていきたいと思う。

静岡県支部

支部長　永井陵次（文38）

静岡県支部の歩みと現状

静岡県支部の第1回会合は昭和50年7月2日、浜名湖畔の「美浜荘」（本県教職員互助組合の厚生施設、今は無い）で開催されている。大学からは柴田周蔵先生を始め、市川安司氏、百瀬寛海氏の御臨席を得ている。初代支部長は第1期の横山菊男氏であり、出席者は14名であった。第2回は昭和57年8月25日、旧清水市の「三保園ホテル」で開催、大学からは理事長・学長・松苓会長の浦野匡彦先生、学生部次長の菅根順之先生の御出席をいただいている。この日役員改選があり、前松苓会長の神津賢一郎氏が支部長に選任された。出席者は19名。

以後の歴代支部長は以下の通りである。

神津賢一郎（27期）
昭和57年8月～平成9年8月
中村且之助（34期）
平成9年8月～平成13年8月
林紘生（33期）
平成13年8月～平成18年7月
神津賢一郎
平成18年10月～平成20年9月
永井陵次（38期）
平成20年9月～平成24年3月
山本昇平（40期）
平成24年4月～平成25年7月
永井陵次
平成25年10月～

この内平成18年の神津氏、平成25年の永井はいずれもその前支部長の急逝による再登板であった。

支部報の発行は「二松學舍大学松苓会静岡県支部報」として平成元年に第1号が発行され、時々間隔を開けながら、平成14年まで続いた。平成19年からは「二松學舍松苓会静岡県支部報」として毎年発行され、平成27年は通算17号となっている。この間支部運営上の必要（主として年会費の振替払込のため）から平成2年に会則が制定されている。――以上は松苓会本部の調査による。

さて当支部の現状であるが、平成5年の21名出席をピークに次第に支部総会への出席者が減少傾向となってきた。静岡県は新幹線

駅が六つもあるという東西に長い県であり、おまけに半島部と山間部を抱えており、支部総会の度に遠隔地の皆様には御苦労をおかけしてきた。平成22年の総会を沼津市で開催したことを最初として、毎年東部・西部・中部の順で開催地を変え、近くの会員諸氏が少しでも出席し易い様に工夫もしてみたが、減少傾向は止まらず、来賓を含めて10名前後の出席者に留まっている。又支部会費の納入状況もかつては40名を上回っていたが、平成27年は32名であった。

現在名簿上の支部会員数は455名であるが毎年10名程度の転居先不明が出るのでそれ以上の把握はできていない。その上、困ったことに昨年から格安の宅配メール便が利用できなくなり、郵便料金が嵩むようになった。松苓会から手厚く助成をいただいてはいるものの、やがては行き詰まることであろう。支部報の紙質や頁数を変更して郵送料の削減を図らねばなるまい。

又、出席者の減少傾向も、どこの支部でも同様の悩みはあると思われるが、支部報と総会時の懇親会だけでは、やはり魅力が薄いであろう。千葉・東京・神奈川等の様に文学散歩なども試みたいものだが、なかなか実施できないままで、支部長も老い一途である。

めでたい85周年記念特集号に愚痴をつづるのも憚られるので、以上で当支部の紹介を終える。

愛知県支部

支部長　松田博文（文55）

創設85周年を祝す

この度は、85周年を迎えられましたこと誠におめでとうございます。

諸先輩方を始め、会員の皆様の積み重ねが松苓会の年輪を太くしたと思うと感慨深いものがあります。

愛知県支部は、新海守先輩（30回卒）が、20年の長きに渡り支部を支えていただいたことに感謝の念が絶えません。

昨年より新しい体制となりましたが、会員の皆様にお力添えをいただき、支部を盛り上げていけるよう微力ではありますが、精進してまいりたいです。

今後、松苓会100周年に向けての轍を見守ると共に、会の益々の御発展を祈念致します。

松苓会近畿連絡協議会

代表　末吉榮三（専12）

松苓近畿の活動

世の中は、人生は奇跡と言ってもよい、人と人との出会いに始まって生まれる。不思議なご縁と言う表現はその意味である。

私たち二松學舍で学んだ者は、今から139年前、明治10年10月10日に先師三島中洲先生が現在地の住居に漢学塾を開かれ、当時、慶應義塾、同人社と並んで都下三大塾と称されるほどであった。

今は没後100年になる夏目漱石が14歳にして二松の門に学を求めた。彼の作風にみる儒教的倫理観や東洋的美意識は、ここで養われた。

誰しも、わが人生の将来を定めるとき、先師、先輩たち、先達との何らかの触れ会い、出会いがあってわが人生がある。

この不思議なえにしに切磋琢磨した絆。この綾成してうまれた一本の糸は君は川流を汲め、我は薪を拾わんとの共生に励んだことが立志の勲章として輝きを放っている。その光輝こそが我らの同窓会「松苓会」である。

誰かが言いました。

二松學舍を評して山水の山道で見つけた一軒の茶店と耳にしたが、今も、こじんまりとした學舍である。

その松苓会が結成されて85年になる。近畿2府5県に在住する卒業生に1期卒の先輩黒川喜久郎氏から招集がかかった。

馳せ参じる者11名。

私はこの11名という数字に驚き、そうして気を強くした。

その日は昭和23年8月15日で、私に丁稚役が回った。以来、68年間、近畿のお世話をし、私が4代支部長に推されて、2府5県の各支部が郷土に根差すうま味のある活動の活性を念じて独自性の育成を願望し、その調整役組織として平成7年に連絡協議会を置くことにした。

この度の松苓会が生まれて85年の節目を慶び、近畿の更なる組織の活性と各支部間の交流を深める方向に努力致します。

協議会人事は、代表に末吉榮三（奈良・12）、本部地区幹事に武内昭徳（兵庫・47）、監事に世古幸生（大阪・44）、事務局長に斉藤衛（大阪・47）。各府県支部長人事は、三重県・稲垣武嗣（33）、滋賀県・角井良暢（49）、大阪府・齋藤衛（49）、兵庫県・武内昭徳（47）、京都府・廣田康男（54）、奈良県・辻一真（39）、和歌山県・明治利隆（47）。

新年互礼会に出席した石川忠久理事長と

三重県支部

支部長　稲垣武嗣（文33）

三重県支部の現況等について

二松學舍松苓会が発足してから85周年を迎え、改めて本大学の伝統の深さを感じ、ここまで夙夜、松苓会の発展にご尽力頂いた先輩方にこころより敬意を表します。

三重県支部も平成6年に正式に会則を作り松苓会近畿支部と共に仲間入りさせて頂いています。

会員数は51名（平成27年7月現在）ですが、活動としては過去に数回ほど親睦を兼ねた文学散歩研修会を行いましたが最近は年1回の総会が精一杯の現状です。

その総会も会員数の割に例年10名前後とやや寂しく感じていますが、そのような中で本年は納所佳子さんが改組第2回日展（書部門）に見事初入選されましたことは我々同窓生としての喜びは勿論、県下の書道界にも女流書家として大きな花を咲かせてくれました。

大阪府支部

支部長　齋藤　衛（文49）

大阪府支部の現況について

松苓会創設85周年に際し、大阪府支部の現況をご報告いたします。

私は、文学部国文学科49回卒の齋藤衛と申します。現在、大阪府立芦間高等学校（総合学科）に教諭として勤務しております。

昨年9月に15年の長きにわたって大阪府支部を支えてこられた浅田資道前支部長の命を受け、第7代大阪府支部長の大任をお引き受けいたしました。若輩ながら精一杯努める所存でございます。今後ともよろしくお願い申し上げます。

大阪府支部は昭和23年に近畿支部として創設されました。戦後近畿一円に散らばっていた数少ない同窓生が、府県を越えて集い結成されました。毎年、黒川喜久郎初代代表のお宅で開催された「新年互礼会」は、平成7年に近畿支部が近畿連絡協議会に改組されてからも毎年開催され、今年で68回を数えました。

そんな関係で、現在大阪府支部独自の活動はほとんどなく、大阪・兵庫・京都・奈良・和歌山・滋賀・三重の7府県共同で活動をしています。総会を兼ねた「新年互礼会」の開催や会報の発行などをしています。

近年、大阪から母校に進学する方がほとんどいなくなりました。原因として近畿圏には多くの大学があることに加えて、不況や下宿費用の高騰が考えられますが、結果として松苓会大阪府支部への新規入会者も0です。

今後は魅力ある企画で今まで参加頂けなかった会員への呼びかけを強めることで、本支部の活性化を図りたいと存じます。

兵庫県支部

支部長　武内昭徳（文47）

支部活動の状況

兵庫県は、人数も多く、広域なため、一同に会することが大変難しく、場所選定にも苦慮している状況で、現時点では、総会等は実施出来ていない。すぐに総会という形は無理だが、今後親睦を含めた見学研修、例えば、姫路城探索後に食事会を実施するなどの計画を考えている。

なお姫路城探索の企画に関しては、兵庫県の会員のみならず、近畿地区そして、可能であれば、全国の支部長を通じて、全国の会員に働きかけを行う予定である。

私は、兵庫県支部長となり十数年を経たが、教師をやりながら兵庫県の松苓会のお世話と言う大役の上に、数年前より近畿地区のお世話と「二兎追う者は、一兎も得ず」の如く、全て中途半端になり、会員の皆さんには迷惑をかけている現状である。

私事ではあるが、仕事面でも現在2学年のクラス担任をしているので、多分、来年度は持ち上がりで3学年となると予想され、進路指導等で忙しくなり、来年度も兵庫県としての総会等の開催は難しく感じている。

しかし、兵庫県としての総会は実施していないが、年に一度、近畿2府5県で行っている「近畿松苓会」の互礼会には、毎年会員への参加を募っている。

現在、近畿松苓会は、平成30年の会発足70周年に向けて、準備を進めているが、その時に発行する会報編集にも携わっている。

現在、兵庫県支部としては、具体的な活動は滞っているが、近畿松苓会の援助及び松苓会本部との連携を取りながら、前向きに活動していきたいと考えている。

奈良県支部

支部長　辻　一（文39）

奈良県支部の歩み

昭和23年8月「近畿支部」発足。

「近畿2府5県」（大阪・京都・兵庫・滋賀・奈良・和歌山・三重）を総括して、

平成6年9月　創設「奈良県支部」総会。「橿原オークホテル」にて武田祈本部副会長　ご出席いただきました。

平成7年「近畿支部」が各2府5県の支部単位の活動に向け（近畿におんぶにだっこの状態からよ

り発展充実を図ろうとして）また「近畿支部」を「松苓会近畿連合協議会」＝「松苓近畿」として、近畿の会員動静、情報収拾などの提供、本部連絡として存続。

平成8年11月　第2回「奈良県支部」総会。「奈良ガーデンホテル大和」にて、山田勝久先生によるシルクロードのお話がありました。

平成20年3月　第3回「奈良県支部」総会。近鉄奈良「百楽」にて磯水絵教授ゼミ研修（学生4名）囲み「お水取り」行事への後援的行事をかねての総会。

平成27年2月　恒例「松苓近畿」の新年互礼会（大阪鳥よし本店）の日にあわせ午前中から奈良薬師寺でのお写経と拝観を企画。解体修理中の東塔（国宝）も見学、渡辺学長、大地先生来ていただきました。

広報活動として過去に「松苓奈良」3回発行。

支部長

初代　後藤恒吉（専12）物故

二代　末吉榮三（専12）現顧問

三代　辻　一（文39）

今日までの維持継承、そのご努力に報いることの常道を思い、恥じる気持ちを覚えます。

先輩のことばに「人間第一」「連帯第一」「行動第一」という「三つの第一」を……「近畿支部」にまだまだおんぶにだっこの現状です。

平成25年2月の薬師寺拝観

香川県支部

支部長　大西邦美（文40）

ようやく軌道に乗ってきた

香川県支部

松苓会創設85周年を迎えられました事、会員としてお互いに喜び合いたいと思います。

香川県支部は、28年後に立ち上げ、57年目になります。しかし、平成9年までの活動記録は何一つ残されていません。

それ以降は、概ね2年に一度は総会を開催し、相互の親睦を図っています。

支部長は私で3人目。

初めの頃は総会に向けた準備のため、本部からの名簿を手探りに案内状を出していたのですが、多くの書状が音信不通で戻されてきました。これを繰返しながら序々に整理され、今では33名の名簿が出来あがりました。

総会出席者も常に10名位で行うことが出来るようになりました。年齢層も若く、現役の方がほとんどを占めています。これが本支部の特長といえるかもしれません。

すでに、フェイスブックで「二松學舍松苓会香川県支部」を立ち上げ、より広く、そして、より身近に目に止まるような取組みを行っています。

最近では、年に1～2名しか入学していない中、出来るだけ若い人との関わりをもっていけるよう努めていきたい。そうしていく事が、支部活動に躍動感を与えるものと考えます。

大学が創立して今年で139周年を迎えます。これほどの歴史を誇りながら、全国的に知名度は今一つ。

これを克服していくには、二松の卒業生の各人が実社会の中で、いかに活躍するかであり、常に、二松の看板を背負い、司令塔の役割を担っているという意識が大切だと思います。

そして、松苓会の役割である、それぞれの地域での連携が重要であります。現実は、総会の開催がやっとという実情。これを打破していかなければなりません。

平成27年度の松苓会事業方針に「本学を単なる出身校ではなく、母校であるという思いに至る存在感のある松苓会にしたい。」とあります。これこそが本会の原点であり、本部のみならず、それぞれの支部がこの方針に沿って地道な活動を続けていきたいものです。

平成27年8月の支部総会

愛媛県支部

支部長　上田善達（文38）

支部の現状

松苓会創設85周年お慶び申し上げます。愛媛県の支部長を依頼されてから、早くも十数年を経ようとしております。日頃、同窓生の皆様にはご迷惑をおかけしていることを深くお詫び申し上げます。

各県の活発な活動に比して目に見えるような活動ができておりませんことを申し訳なく心苦しく思っております。

また、多くの支部長の皆様より支部会報をお送りいただき、各地区の熱心な活動に感心するとともに、支部長としての仕事を満足にしていない自分を恥ずかしく反省しています。

さて、今年は漱石没後百年、来年は生誕150年の「記念年」となります。

皆さん、ご承知のとおり、28歳青年漱石は明治28年4月、尋常中学校（現松山東高校）の嘱託英語教員となり、熊本第五高等学校に転任するまでの一年間、松山で暮らしました。

昨年の第87回選抜高校野球は、その漱石ゆかりの二松學舍大学附属高校と松山東高校の対戦で地元愛媛のテレビや新聞でも二松學舍のことが紹介され話題となりました。

卒業生として大変嬉しく、心から附属高校の活躍を念願し声援いたしました。昨年秋の東京都大会でも、決勝で関東一高に惜敗したものの、準優勝しました。今春の選抜高校野球出場を強く期待しております。

松苓会が創設されて85周年、先輩方のご尽力に感謝申し上げ、母校二松學舍大学と松苓会のますますのご発展をお祈りいたします。

福岡県支部

支部長　永淵道彦（文36）

福岡県支部の現状と提案

松苓会福岡県支部は、前支部長の山田卯典先生（16回）が平成2年夏、県支部長を引受け、永淵道彦（36回）が支部事務局を依頼され、平成13年夏、県教育界の要職で益々多忙になられた山田先生と交代し、永淵が支部長になり、現在に至っている。

山田前支部長時代の前半は、支部総会も推定200人弱支部会員の一割の高い出席を維持したが、後継の永淵支部長の現在は、支部会員も実質7、80人に減少し、支部総会も一ケタ出席に至っている。

由々しきことに、40、50代以下の支部会員の減少が著しい。少子化や、都市部への人口ストロー現象もあろうが、理由は理由として、福岡県のみならず、首都圏を除く、全国各道府県支部の現状であると思量する。

このままでは二松學舍大学は全国区の大学ではなくなり、現状では、各道府県支部多数の消滅の危惧も禁じえない。

愚考するに、学校法人二松學舍当局、二松學舍松苓会本部、並びに各道府県支部の三者が協力し、まだまだ活躍している、40代以上の、影響力ある卒業生、並びに二松への理解ある人材を掘り起こして取込み、人的拠点を作り、出身道府県への就職と二松への進学の、循環システム構築を提案したい。

現状から緊急を要するが、これは難事業でもある。人的拠点は大いなるボランティアに裏打ちされた人材によって効果がもたらされると思量されるからである。

紙幅の関係で大組みの提案に留めるが、福岡県支部からの現状を踏まえた提案としたい。

長崎県支部

支部長　黒瀬孝志郎（文38）

松苓会と私

私が松苓会の存在を知ったのは25年間勤務した長崎日本大学高等学校に公立学校を定年退職後に見えた太田昭吉先生（27回卒）からだった。太田先生からお誘いを受けて、長崎県支部に参加するようになった。そして、平成10年度まで長きにわたり支部長を務められてきた故坪ノ上辰弘先生（専16回）の後を受けて長崎県支部長に就任した。

就任当初は長崎日大の教員をしていたこともあり、前支部長の残された貴重な資料のお陰もあって、支部活動としては結構順調に運営することができたように思う。

長崎県は南北に長いこと、離島を抱えているという地理的なハンデもあったので、県北は佐世保市、県央は諫早市、県南は長崎市と三大拠点地をローテーションさせながら、支部総会や懇親会を開いては「支部だより」を発刊して、こまめな運営を心がけていた。しかし、個人情報保護法が平成17年4月から施行された頃から教員が多い長崎県では転勤族の住所がつかめなくなったり、「支部だより」や「総会開催のはがき」を送付しても戻ってきたり、返事がなかったり、参加者が数名になったりして私の「やる気」にも次第に陰りが現われてきた。一方で松苓会本部の役員や支部長には38期生が多数を占めてきたので、職責が全うできない心苦しさを感じながらも松苓会総会には毎年出席し続けてきた。

支部の状況は斯くの如きである。長崎日大勤務中は「教育センター明倫館」や「長崎日本大学中学校」の設立・運営に14年間携わり、高校の学級担任や教科担任として教壇に立ったのは、短期間であったが、教え子を母校二松に数名送り出せたのは、望外の喜びであった。「日本大学」には母校と競合する学部があって、この進路指導は困難を極める荒業だった。

ところで、将来の松苓会のことを考えると、今のままで大丈夫な

のだろうかと心配になるのは私だけであろうか？他の大学でも同様のジレンマを抱えていると聞く。「同窓会」自体の存続もさることながら、近年首都圏からの入学者数が多数を占めるようになって地方出身の入学者が大幅に減少したことから多様性がなくなりつつあるそうだ。そんな危機感を抱いた私学の大規模校は先手を打って地方に分校化を進めたり、サテライト授業を展開したりしている。

一方、我が母校はどんな手を打っているのだろうか？

松苓会の創設85周年に当たり、関係された松苓会の会長、役員を始めとする皆々様、支部長、そして大勢の会員の皆様のご健勝、さらには二松學舍大学の発展を祈念して、末文とする。

宮崎県支部

支部長　宮崎宣幸（文41）

宮崎県支部の現況

宮崎県支部は、松苓会員は70名近くおり1名を除いてすべて文学部卒です。初代支部長平光銀太郎先生から、安藤典四郎先生、山川定一先生、私と引継いで来ました。

多忙な時に、2年間小野先生にお願いしましたが、また時間ができましたので引続いてお世話させていただいています。

私の学生の頃（昭和44年～48年）は一学年に3～4名在籍していましたので宮崎で県人会をやろうとしました。そして、昭和46年頃に、宮崎市内の大淀川沿いの料亭で鍋を囲んで支部総会をしました。当時の平光支部長を初め、10人近くが集まったと思います。延岡から桑原敬子さんがわざわざ参加してくれたのを思い出します。その後、安藤先生が支部長になられ、高校時代の恩師だったこともあり、親しく連絡させてもらいました。

3代目支部長山川先生は宮崎南高校時代に同僚としてご指導を受けました。その時、山川先生、私、落合正樹先生、桑山祐子先生と二松學舍の卒業生が4人も同じ高校に在職し一緒に仕事をしたことがありました。卒業生の和田隆先生が教育実習に見えたときも、先輩の山川元支部長が指導教諭だったと記憶しています。

山川元支部長は、宮崎県の将棋の名人位を何度も取られ、全国大会に出場されていましたので名前だけは子供の頃から新聞紙上で存じ上げていました。谷川名人の自筆入りの扇をお土産によくいただきました。

私が支部をお引受けしてから、「パリの朝市」という洋食レストランの会議室で何度か支部総会を開催しました。松苓会本部からも役員の先生がお見えになったりして、毎回5～7名位参加者がありました。当時は都城から、谷川雅子先輩や黒木勝彦先輩、古沢美和子先輩、中村国春大先輩などが参加してくれました。その後、会場をフレンチの「雲の平」に代えて開いています。出席者が少ないことも結構ありますが、少なくても1年に1度ですので、できるだけ毎年開きたいと思っています。

平成16年11月の支部総会

以前は卒業後大半は教職員になっていましたが、最近では一般企業に就いている卒業生が増えています。OBの中には詩のボクシング県チャンピオンの藤崎正二先生や書道の県無鑑査の後藤祐子先生、地元県民マラソンランナーとして活躍している斉田先生、また中学校で校長等の管理職に就いている先生も複数（4・5名）います。

このように素晴らしい活躍をしている方が数多くいるのに母校二松學舍に対して誇りと愛着を持っている卒業生が少ないというのが非常に残念です。宮崎県内のもっと多くの高校生が二松學舍に学んで欲しいと切に願う次第です。

鹿児島県支部

支部長　岡元正昭（文31）

二松の思い出

「二松」この語は、高校3年時の担任から聞いた語であった。君には国漢書道専門の大学があるからとすすめてくれた。鹿児島の地方都市指宿の指宿高校でのことだった。専門学校時代の郷土の先輩方はいたのだが久しぶりに鹿児島からトップをきって二松に入学した。

格別のうれしさもあった。

50数年前、父は教員で給料も少なく学費や生活費のことを苦慮していたようだった。アルバイトもやり、奨学金をもらい4年したら帰鹿するという約束で親から上京を許可された。嬉しさ半分不安半分、部屋も探す間もなく親戚の部屋に数か月ころがり込みお世話になった。

新宿の戸塚というところで近くに早稲田大学がありよく講義をタダで聞きに行った。マイクを使い多くの学生にまじって平気だった。

二松學舍は九段坂を登り日比谷へ行く途中都電通りから石段を

少し登ると中洲先生の像があり、毎朝一礼して校舎に入っていた。勿論木造校舎で入り口の左右が事務室になっていた。購買部もあり、パンや牛乳など売る老人がいた。となりは狭い入り口ではだか電灯のぶらさがった図書室のようなところがあった。あまり入った記憶はない。校舎は古びたものであったが当時の教授陣は超一流の先生方だった。

中洲先生銅像前で、右から佐藤さん、関さん、植松永雄君、筆者の母（昭和38年頃）

佐古純一郎先生、関良一先生、山岸徳平先生、次田香澄先生、加藤常賢先生、石川梅次郎先生、金子哲太郎先生、石橋啓十郎先生などなど、学友は北海道から沖縄まで30数名だったと思う。中でも一番の親友は山梨の植松永雄君、個性的で魅力的な人で今でも時々電話で交際している。また四国出身の乾一夫君、優秀な人で早くに他界してしまった。残念でならない。

松苓会の支部長を山本諭支部長から引き継ぎ17年、最初は皆さん若く支部総会もよくやっていたが、高齢化が進みこの頃はまったく音信不通、支部長として責任を感じている。

感謝状をいただく資格はないと思うのだが…

沖縄県支部

支部長　金城健一（文38）

二松學舍大学で得た「人間の絆」という財産

「花も香し／弥生月／生まれし／郷を出しより／とこしえに／汝はわが友／習志野の／ああ白亜の館」この詩は、千葉県習志野市に在った学生寮「沖縄学生会館」寮歌の一節である。

1962年に開設された75名収容の「学生寮」に入寮できたのは、二松學舍の入学式から半年後の秋のことだった。

沖縄の祖国復帰前、パスポートを持ち、当時沖縄の通貨だった米ドルを懐に入れて那覇港から鹿児島港まで定期船で18時間。鹿児島港の入関事務所で日本円に交換して、西鹿児島駅から国鉄の「急行」にゆられて東京駅まで三十数時間の旅だった。

「武蔵小山」の従兄の下宿にもぐり込み牛乳配達のアルバイトを見つけ、お袋からの送金20ドル（7200円）で何とかやって行けそうだと思っていた矢先の梅雨の頃、バイト先渋谷・天現寺の牛乳屋のオートバイのタイヤを、路面電車の線路にスベらせて転倒、牛乳瓶を全て割ってしまい、その日のうちに牛乳屋を首になり途方にくれている時に「学生寮」を紹介してくれたのが、当時二松の4年生で冒頭の「寮歌」を作詞した宜保喜久先輩だった。

1日2食付き4500円の安価な「寮費」でなければとても4年は持たなかったろうと思う。二松學舍への受験を推めたのも二松出身の母校首里高校の船越清治教頭と国語担当の仲本幸新先生だった。

2年に進級した頃沖縄での父母会から戻られた浦野理事長に、九段会館の日本遺族会の会長室に呼ばれた「貴君は戦争遺児だそうだな、お母様にいろいろとご苦労なお話をうかがった。私が身元保証人になるから日本遺族会の奨学金を受けなさい」と励げまされその恩恵を受けた。

大学卒業後沖縄に帰り、那覇市議を4期勤めながら「松苓会県支部長」の大任についたのも先輩方への恩返しと思ったからである。

教養のB組の頃の仲間9名で今も旧交を暖めている。彼等との絆は二松學舍で得た僕の最大の財産だと思っている。9名の仲間の中で大学に残った二人の小林君が僕と二松學舍とをつないでくれた「深い絆」だと感謝している。

最後に、松苓会沖縄県支部の状況を記して置きます。

初代の支部長は、琉球大学教授を務め二松學舍大学名誉文学博士の称号を授与された1回卒の中村竜人氏。その後、文中に出てくる船越清治（1回）、仲本幸新（16回）先生が引き継ぎ、平成11年から私が務めている。なお、仲本先生から引き継ぐ2年位は宜保喜久先生（34回）に代理を務めていただいた。

支部会員は現在、登録数24名。活動としては、母校の父母懇談会、大学説明会等の開催にあわせ、支部総会等を開催している。

（山原クイナと共存する庵にて）

平成15年7月「卒業生との懇談会」
日航那覇グランドキャッスルにて

母校の思い出

特集号の発行に当たり、名誉教授や会員に、母校二松學舍大学や恩師、また松苓会活動の思い出等を、現職の教員には大学の状況等をご執筆願った。掲載は概ね卒業回数順とした。

二松国文の黄金時代

雨海博洋（専19）

昨年のホームカミングデーで、久保田名誉教授と

私が二松で学んだのは、専門学校から新制大学に移る寸前の頃であった。言うならば専門学校の最後の時代であった。今と同じ場所であったが、石垣の上の2階建の小さな学校であった。中文50名、国文50名から成っていた。

学長は塩田良平先生であった。先生は樋口一葉の第一人者であったが、『枕草子』『源氏物語』『平家物語』にも通じ、その朗読は素晴しいもので、その頃ラジオ講座の『枕草子』は受験生のみならず、満都の女性の人気講座で、毎夕刻、夕食の仕度を忘れるほどであった。

ある時、ある学生が「先生のご専門は何ですか」と失礼な質問をした時、先生は「文学は川の流れの如し、とう〳〵と流れ大海に注ぐのである。それぞれの流をたどる必要がある一定のものに制限されては真の姿をつかめない」とおっしゃられたのにはいたく感銘をいだいたものである。

一方、塩田学長と親交のあった『源氏物語』の泰斗池田亀鑑先生の重厚にして迫力のある講義も忘れ得ない。当時源氏の大成のため過労で、心臓をいためられ、2階の階段を上るのも休み〳〵であった。教卓の前に坐わられても10分ほど胸をさすってから始められた。それでも休講もなく二松を大事にされた。

やがて先生は「私は疲れているから、私の前で、雨海君に解釈をしてもらいましょう」と、いつも一番前で先生のお話をきいている私の名を覚えられ、毎週先生の前で解釈させられるようになった。一つ一つ丁寧にアドバイスされるので大変勉強になった。特に源氏の感動を自分の胸で消化してから語りなさいの教は今もなおわが胸に残っている。

当時、若い専任であった萩谷朴先生の『枕草子』は徹底的に本文を重視され、どこまでも本文を通し、そこに解釈の道を見出す『解釈学』を樹立された。

その他『平家物語』の富倉徳次郎先生、俳諧の中村俊定先生、近代文学の吉田精一先生、更に『万葉集』の森本治吉先生など二松国文の黄金時代といってもよいであろう。

（名誉教授）

佐古純一郎先生との出合い

菅根順之（文24）

浦野匡彦先生に突然呼び出された。確か昭和32年6月のことだったと思う。

執務に何か不行届きがあったかと戦々恐々として理事長室に行くと、浦野先生と佐古先生と学生時代から大変親しくつき合っておられた杉村正夫先生がおられ、浦野先生が佐古先生に二松に来てもらいたいが、君、どうだ使いで行ってきてくれないかとお二人の名刺を渡された。単なる使いではないと躊躇したが理事長の仰せ、はいと応えて理事長室をあとにした。

早速佐古先生に電話をかけ柿の木坂のご自宅に向った。都立大学前駅からゆるやかな登り坂を行くと大通りの交差点に出る、当時はまだカヤぶきの農家が点在していた。ご自宅は大通りから車がやっと通れるくらいの細い通路に面していた。

玄関の格子風のガラス戸は折りからの梅雨の水溜の泥水が高くはね返っている。開けるとそこには本がうず高く積まれいた。先生が「さあ、ここに」と案内してくれた。先生の人間離れした風貌には正直いって戸惑った。大事な使い、

それでなくとも緊張しているのに……。少しオーバーにいえばとてもこの世とは思えない心地を覚えた。こうした緊張も先生の人柄の所為か奥様の差し出すコーヒーによってか自ずとほぐれていった。

4度ほどお伺いし、やっと先生は天然パーマの頭髪を掻きむしるようにガリガリッと掻いてから一呼吸おいて「わかった、いこう」と笑みさえ浮べて快諾してくださった。

先生とはそれから何事につけても腹蔵なくおつき合いさせていただいた。先生の授業は場面場面に応じて喜怒哀楽を見せるなど学生に大人気、礼を尽くしてお願いにあがった甲斐があった。

初対面のあの奇妙な仕種とコーヒーの味は今でも忘れられず折に触れて懐かしく思い出される。

（名誉教授）

（注、浦野匡彦先生は当時常任理事。理事長室に詰めておられた。昭和37年に理事長就任）

下河部会長の頃など

横田睦夫（文25）

松苓会が創設されてから本年85周年を迎えるとのこと、お目出とうございます。平成4年までは松苓会長には大学理事長が兼任され教職員が事務等に当たっていました。

平成4年から専任の会長として、旧専門学校4回卒業の下河部得三氏が就任され、本部室は大学内に新設され、事務も経費も大学におんぶされてのスタートでした。

当時私はまだ企業に勤めていましたが、下河部会長の招請でお手伝いすることになり、会長は毎週火曜日に、私も共に出勤して基礎工事的諸活動に努めてきました。

会長は「衣・食・住」の旗を掲げて発足されました。「衣」というのは規約の整備、役員を構成して機関紙を発行する、「食」は活動費としての会費の徴収、「住」は支部事務所を持つことです。

これは将来の課題でしょうか。

会費は支部の育成と支援、機関紙（会報）の発行、総会等の活動に当てられますが、任意の納入ではなかなか集まりません。各大学同窓会と情報交換して、卒業時に数年分をまとめて徴収するということになり、それで漸時活動ができるようになりました。

一方、会員と母校の絆を強くする事業として「ホームカミングデー」を開催し、新会員から年配会員まで参集する会が、当時の今西学長から提案され、毎年開催していくことが決定されました。

全国に在住する会員が年1回自由に参加し、母校の現状を確かめ、教職員、現役や退職された恩師と情報交換や学生時代のことを歓談したりして意義を見出したりすることにしました。

またそうした前後に創設された「松苓会奨学金」も、学業を続ける後輩の励みになることと信じます。

最近ではスポーツ界が活況を呈していますが附属高校の夏の甲子園大会出場にも温かい支援の手をさしのべたいものです。会場から校旗が掲揚され、校歌の斉唱を聞くのは感動大なるものがあることでしょう。

（元幹事長・事務局長）

青春の群像

斎藤喜代子（文26）

歳月を厭うわけではないけれど、一年のうちで私がなるべく早く通り過ぎてしまって欲しい月日がある。それは3月25日、言わずと知れた卒業式の日である。

誰が定めたのか知らないが、それまで向うの方に追いやってしまっていた雲のような陰影が、3月に入ると必らず次第に背に迫って、何とも言いようのない切なさが胸を締め付ける。

教え子たちとの別れである。教員生活の中にこの時間さえなかったらどれほど幸せなことかと、毎年、毎年憂鬱な思いを重ねて来た。

今年もやがて――いや、すでにその世界から退いた身であればもう大丈夫、免疫は出来た、と思いきや、意地悪くも松苓会より教え子たちに向かって何か書けと強迫されて、しぶしぶと机の奥の奥の方に納めてある箱を引っ張り出したところ、ひらりと一枚、手からこぼれた写真があった。

平成4年の二松學舍祭

この子たち、この子たち、語劇祭でそれぞれが役柄に応じて一生けんめいに扮装して、やかましい先生に少しでも賞められようと精いっぱい演じて見せてくれた、あの健気なさ。もういい、もういい！あの子も、この子も、みんな一緒

になって一つのものをよくぞ見事に完成させてくれました。

今はそれぞれどうしているのだろうか。大学生とはいえ、まだまだあどけなさの残るこの子たち、各自の抱いた夢はどうなっているのだろうか――大丈夫！負けちゃいけない！人生は七変化、それぞれが定めた本舞台で、偽らぬ自己を勇気を以て真剣に演じ切って欲しい。

今年もまた3月が忍び寄るが、この一枚の写真に残された教え子たちの、真剣な、そして純粋な熱情に支えられて、どうやらいつもとは違った3月を迎えることができそうな気がする。

私のうしろにはかくも見事な名優たちが控えていることを嬉しく思い、ここに大きな拍手を以てカーテン・コールを所望し、青春の群像たちの幸せを心から祈りたい。

（名誉教授）

継ぐを持て！松苓会

松田　存（文26）

現在では大学・大学院・両附属高等学校・中学校を擁する二松學舎の、専門学校の第1回卒業生から2万人余りの集まりである松苓会、その85年の節目に際し慶賀の念を禁じ得ません。

その間、母校の教壇に立ち、且つ松苓会本部の常任幹事・副会長として在りしこと二十余年、数々のことが思い出されます。

まず本部会報が装を改めて創刊されたのが昭和62年のことで、年2～3回定期的に刊行されてきたものの、その途中、立ち返って見ると欠号のほか大部の余部があるなど、これはいけないと思い立って整理、何とか欠号を補充のうえ第1号から第30号（平成16年）まで若干数の合本を残すことの出来たのは幸いなことでした。その後も第31号から第44号（平成23年）までを刊行、これで何とかその歩みを回想することが出来たからです。

また今では装を替えている二松學舎大学新聞に連載された母校教授陣による三島中洲先生行余録の記事を一本の冊子として纏めることが出来たことです（平成17年）。

当時は現在の新校舎が成り、松苓会室が設営され下河部・武田会長に横田事務局長と、きわめて意欲的な面々と一緒に会を運営することができたことは何よりでした。殊に筆者の場合、時折都道府県支部に参じるとゼミ生をはじめとする教え子と会うことが出来たことでした。そんなこともあって、本部役員には母校に在った卒業生がその任に当たるべきことを痛切に感じたのですが、このところ少々軌道が転じたのは洵に残念なことです。

松苓会の刊行物といえばあと一点、専門学校第一回卒業生の回想録ともいうべきA5判冊子型の「茯苓」が第8号にて休刊となっていたものを第9号～13号と復刊したことです。これ又、一時停滞していたのを再刊することが出来、スムーズに行ったのですが、以降は卒業生が多く、案内の不備等で頓挫したままです。これとて会報にて募るなど工夫次第で可能な筈です。

85年という〝歳月人を待たざる〟節目に酔うことなく、継ぐを持てスムーズな流れを作るべきでしょう。平成28年正月末日

（名誉教授）

二松學舎大学に勤務しての回顧

久保田美年子

1972年、二松學舎大学中国文学科に勤務する。

熊野正平教授、竹中伸教授、石川梅次郎教授、市川安司教授などの錚錚たる教授陣に囲まれて、厳しくまた温かい薫陶を頂いて32年間勤務させていただいた。

在任していた頃の忘れ難い思い出は、学生たちとのクラブ活動だった。本校の専任教師はクラブ活動の顧問を一つ乃至は二つ担当した。中国文学専攻の学生たちのクラブ活動は、主に大学祭で上演する中国語劇のシナリオの再検討や台詞の発音指導、中国語弁論大会出場者の原稿や発音のチェックなど。

在職時代ゼミの学生と

春・夏休みの3泊4日の合宿は集中して特訓する絶好の機会となった。しかし指導を受けるはずの学生がアルバイトを優先し、発音指導を欠席する者も少なくなく、クラブ活動は常時順風に進行

するとは限らなかった。

しかし、合宿最終日の打ち上げコンパや花火大会は、満面の笑顔で最高の盛り上がりを見せ、後期の活動へと繋ぐことができた。

毎年、夏休みには北京大学歴史学科で開講される夏期中国語短期留学（3週間）を引率した。午前中は中国語の授業で、午後からは、北京大学歴史学科の教授による歴史、民族、文化などの講義を受講し、歴史遺跡の実地参観にも案内解説いただいた。学生たちには最高に充実した留学体験となったであろう。

曽在秦京修学全
笄年帰去茗渓天
羨君今日春風裡
秩満題詩五彩箋
岳堂

かつて西安の地にて学を修めし
女子
成人し帰国して茗渓に真理を究
めて
羨ましき哉、君今日春風の吹く
三月
職修むるを詩文に詠じ五彩紙に
称えよう

この漢詩は2004年3月、定年退職する際に石川忠久学長が作詩され、送別会の宴席で朗詠され贈って頂いた。

西北大学での初体験の全寮生活、帰国後、教育大への再挑戦等の苦労が詠みこまれており、32年間の喜怒哀楽も優しく労って頂いた思いであった。（名誉教授）

愛蘭親竹―書と蘭―

難波正久（清邸）

「春 馨」　傘寿展（鳩居堂にて）

二松學舎を退任して早や10年が過ぎました。

この間、事故や催事など多々ありましたが、ますます多忙に過しております。書作、蘭作、陶芸、金石。文房四宝など多岐に亘っています。中越地震（生家全半壊）、柏崎沖。古稀展（日・全中国蘭花博・蘭亭）、喜寿展（日・日中国交四十周年蘭博・浙江）、傘寿展（鳩居堂、全中国蘭花博・雲南）などです。

書業は60年を越え、主宰する書峯会は創立41周年を迎えます。毎月、年の発表、海外研修に行っています。これ等が元気のもとかもしれません。

東洋蘭作りも60年余り、楽しみの一つです。約二千鉢を越え、限度となり、新潟・長野・千葉・自家と分散して、忙しく手入れをして巡っています。蘭書同源と考え、自然の良さを感じています。蘭は、人間の言う事はきかず、水やり10年とも言われて自然との調和を大切にしています。心の安らぎと平和が感じられます。

この頃、世間では展覧会が大小開かれています。歴史や伝統が感じられるものが多い中で、仲良しクラブ的な軽いものが多い。人間の輝きが少ない。私も81歳となり、一歳からの出発と考えています。大自然の生命・魂・輝きを少しでも取り入れることが出来たらと希っています。小さな箱物の中の芸ではなく、大きく展開していきたいと切に思っています。

諸氏のご健勝を祈ります。

（名誉教授）

思い出すまゝに

川久保廣衛（文35）

奥様と（平成24年7月）

定年退職して11年になりますから、81歳となりました。

現在、松戸市の日暮、八柱霊園の近くに住んでおりますが、実はこの八柱霊園という名称は、在職時の上司であった清水義昭学長に、嘆息まじりに聞かされた名称なのです。

「年一度の盆にはな、君、…朝の3時に起きて車を出さないと、帰えりの車が出られなくなるんだよ……あの霊園は。」

たしか横浜郊外に住んでおられた学長にとっては、毎年のお墓まいりの車の混雑に閉口されていたのが如実に感じとられました。徒歩10分程度で霊園の正門に着くマンションに住んでいたこともあって、少くとも週に、2、3度は霊園にまいります。散策のひとつですが、二つほど著名人の墓について書いてみます。

一つ目は、神社の鳥居を構えた墓、あの講道館柔道の創始者嘉納治五郎の墓でした。題額は西園寺公望、碑文は諸橋轍次。治五郎が氷川丸で日本へ帰途、船中にて病没の記述がありました。今なら薬ひとつで助かったものをと思わない人はいないでしょう。

二つ目は、西条八十の墓です。これは雨に濡れての学生達の行進の時、早大の教員でもあった西条八十は、旗を掲げて先頭を切ったとのこと。たしか霜柱を踏んで、八十の墓をみつけ出したことを記憶しております。車が道路なみに走れるコンクリートの道路もありますが、一歩墓地に入りますと霜柱の立つ地所があるのがこの霊園の大きさでしょうか。

清水学長は葬儀が済んで、この霊園の清水家の墓があるはずですが、それは宿題として残こしておきます。

写真は、マンションの夏祭りですが、退職後にとう〳〵マンションの理事長（アミダくじ）にされた時に、見廻りかたがた交流を深めていた時の写真です。

（名誉教授）

39年間の教員生活を振り返って

金子　茂

まずは「松苓会」の創設85周年おめでとうございます。

昭和49年4月に奉職し、平成25年3月の定年退職までの39年間に渡り体育・健康スポーツの教員として教育の実践と研究等に携われましたことは身に余る光栄です。これまでご支援、ご指導ご鞭撻を賜わりました多くの教職員の皆様には感謝申し上げます。

就任当初の体育実技は、校舎5Fの屋上や内庭のバレーコート2面に満たない所で行うという状態でした。常に実技は1人、2人で出来る柔軟運動、体力アップの補強運動、サーキット・トレーニングが中心でした。よく皇居一周走や歩行も行いました。そのような状況下でも学生諸君は実に元気旺盛でした。

昭和53年3月、100周年記念校舎の竣工により体育館が完成し球技種目等も出来るようになりました。当時はカリキュラム補填充実の為に、水泳実習、スケート実習、荒川土手歩きの校外授業も実施していました。

現在追試験制度はありませんが、私は追試験対象者を中心に山の手線一周の歩き（8時間余、52000歩程）を13回実施したことも忘れられません。

昭和57年4月、全1・2年生の沼南校舎移行履修に伴って、体育館やグラウンドもかなり整備され念願のスポーツ種目が実施できるようになりました。

ただ3クラス同時授業もあり時には手賀沼方面散策、沼南自然トレイルなどと称して農道や林を通る歩きも行いました。

学生自治会と連動し体育授業の一環でもあった大学挙げての体育祭は、国立代々木体育館、都体育館、その他で開催されましたが、沼南校舎（現在の柏キャンパス）施設充実に伴い大学グラウンドで平成7年まで行われました。

昭和54年度 体育祭（東京都体育館）

平成7年、シーズンスポーツと銘打った校外授業、夏の蓼科山登山・霧ヶ峰ハイキング（金子茂担当）、夏の妙高ゴルフ実習と冬の妙高スキー実習（白石まりも先生担当）が開講されました。

平成15年、九段の附属高校の校長兼務を拝命し、平成16年夏から私が担当する登山・ハイキングが免除されました。

大学設置基準の大綱化による制度の弾力化を受けて、平成8年から体育は総合科目に入り必修から選択制になりました。更に名称も体育から「健康スポーツ」へと変更になりました。

平成21年、大学機能の九段キャンパス集約に伴い、健康スポーツ

昭和54年度 体育祭（東京都体育館）

の講義科目は頗る多くが受講しています。実技は柏キャンパスで行う事で受講生が極端に少なくなっています。様々な観点から、何らかの改革を期待したいところです。念願のゼミ、具体的には基礎ゼミ（8年間）、生涯スポーツゼミ（5年間）を担当することが出来ました。ゼミ運営に当たっては、シラバスを踏襲しながらもあれこれと、最善の道を模索したことが記憶に新しいところです。

これまで担当してきた実技、講義、ゼミ科目等の授業内容、運営など全般を振り返れば、改革、改善する所も多々あったと述懐しています。二松學舍の学生は、本質的に素直かつ純朴で真面目に勉強する「気骨稜稜」の学生が多かったという印象です。そうした学生諸君と正面から向き合い、教えながら且つ多くのことを教えられて過してきました。このことを大変嬉しく思うと同時に感謝しています。

加えて、柔道部や弓道洗心会の顧問を経験したことも心に残ります。

昭和63年5月、ご縁でインド生まれのカバディを故新井慧誉先生らと導入し、平成2年、第11回北京アジア大会の代表選手を輩出しながら二松學舍大学にしっかりと根付かせられなかったことは、体育人として忸怩たる思いです。

与えられた紙幅を超えても尚、着任当初からご指導ご鞭撻を賜った中島茂先生、森本富子先生、成田式部先生、西田栄子先生をはじめ他の先生方のエピソードなどを交えての言及はできませんでした。

現在、私は歩く速さのスロージョギング（3～5㎞）や歩行（30～60分）などを日課の一つにして過ごしています。

最後に、松苓会の皆様のご健勝とご活躍を祈念申し上げるとともに、二松學舍大学並びに松苓会の益々のご発展を祈念申し上げます。

（名誉教授）

二松學舍と私のえにし

中澤　昇

平成7年2月より平成13年3月まで私は松苓会事務を担当し、その間『二松學舍松苓会報』第11号から24号までの発行に関わってきた。当時の会長は、下河部得三・武田祈、幹事長は横田睦夫の各氏であった。

私は昭和47年4月、二松學舍大学附属高等学校に専任教諭（理科）として採用された。選考の面接をしていただいたのが当時の教頭であった佐佐木鍾三郎先生であった。

夏休み実家の長野に帰省した折、床の間に飾られていた掛け軸の左端に「明治三十七年四月　東宮侍講従四位勲三等文学博士三島毅撰」の文字を発見した。

当時、理事長であった浦野匡彦先生は毎年の入学式の訓示で「二松學舍創立者中洲三島毅先生は欧化一辺倒の明治時代にあって東洋の学を継ぎゆくことを目的に本学を創立した立派な先生である」と新入生に烈々と話されていた。まさかと思ったが、実家の了解を得て軸を持ち帰り佐佐木先生に見てもらうと、石川梅次郎先生に返り点を付けて読んで頂いたうえで、説明してくださった。果たして、この軸は私の本家の祖「中沢髙簡」を顕彰するため、弟子一同が中洲三島毅先生に碑文を依頼して建てた石碑の拓本であることが分かった。

改めて帰省の折、確かめると、碑は現在の長野市立大豆島小学校東方約100メートルの地に1メートルほどの礎石の上に据えられ、碑面は縦167センチ横74センチで、文209字、詩4字×8行が記されていた。

中沢髙簡翁の碑

二松學舍が途端に身近なものとなり、不思議なえにしを感じた。

附属高校野球部が悲願の甲子園選抜高校野球大会（第52回）に初出場したころのことである。この軸は私の退職に先立って平成20年10月学校法人二松學舍に寄贈した。

（元松苓会事務局担当）

「沖山光の研究」

磯　水絵（文41）

２０１５年度から本学専門学校第一期（夜間）卒業生・沖山光（１９０５～90年）先生の業績を発掘顕彰する共同研究プロジェクトを、東アジア学術総合研究所内に組織した。

古典文学を専攻する筆者が参加するのは、都立三鷹高校同期生の呼び掛けがその切っ掛けであったことによる。構造学習論の提唱者として著名な先生の業績を、その方面の研究者、太田由起夫・樋田明両氏から教えられた。

そこで、学内の教職支援センター所属の榎本善紀特別招聘教授・小渕朝男教授を誘い、太田・樋田両氏と5人で共同研究を開始した。研究開始初年度から、ワークショップを続け、先生の近代国語教育に遺した足跡の発掘及び広報に努めている。

さて、その広報の一端として、

先年、東京支部の会報に二回報告を掲載したが、以下は、これまでに研究会席上において報告された成果のまとめである。なお、来年には研究を一書にまとめて刊行する計画である。

先生は明治38年、東京・八丈島に生まれ、大正14年に東京府青山師範学校を卒業、同年港区桜川小学校の訓導となる。昭和3年に青山師範付属小学校訓導に移り、併せて二松學舍専門学校（夜間）に第一期生として入学する。

書斎の沖山光氏

それ以前にも他校に籍を置き学ぼうとした形跡があるが、そこは先生の理想と相容れなかったようで、ついに青山師範付属の訓導となったのを機に選んだのが本学であった。昭和6年に本科を卒業し、中学校漢文指導免許を取得する。

後年、兄が文部省教科書局嘱託となり、同省教科書編纂委員を委嘱され、監修官・石森延男の許で第6期国定教科書の編纂にたずさわるについては、その時の学問が裏打ちとなり、支えともなったとみて間違いはない。

特に当用漢字の選定と、小学校6年までに配分するに当たっては、本学における漢文学受講が有用であったはずで、それまでの文語文片仮名書きを口語文平仮名書きに変換する、その政策に携わった功績は大いに称揚されるべきである。

（副学長・文学部教授）

田中　伸先生の思い出

金井　康（文41）

昭和44年4月、二松學舍大学に入学した。20歳の春だった。入学式は旧軍人会館、九段会館で行われた。東京大学と東京教育大学で入学試験が中止された年である。大学の屋上ポールには日々、国旗がはためいていた。大学紛争とは無縁の「けはひ」があった。

大学の授業は新鮮だった。分かっていることばかり、決まったことばかりを受験勉強として学ぶ高校までの授業とは別世界だった。雨海博洋先生、石川梅次郎先生、加藤常賢先生、貴志正造先生、剣持武彦先生、田中伸先生の講義・演習に関心と感銘を覚えた。

研究者に旬があるとすれば、その時機に教えを受けた学生は、幸いと言うほかはない。私が二松學舍で学んだ9年間は、正にその好機だった。田中伸教授の研究が旬を迎えていた。田中ゼミを選び、先生の導きで大学院にも進むこととなった。

先生のお住まいは井の頭恩賜公園に隣接する地域にあった。門から喬木の聳える脇を抜けて玄関を入ると、すぐ左が先生の書斎だった。壁面全部が書架で、専門書がぎっしり詰まっていた。度々伺わせて頂いたが、机上には常に原稿用紙と万年筆があった。その度、近世文学や執筆中の論文について熱く語られた。バレエ教室を開かれている奥様が、笑顔でお茶とお菓子を出してくださった。差しかえのお茶が出されるまで、じっとお話に聞き入るのが私の常だった。知らぬ事が多かった。耳学問が可能な時代だった。

思い返すと、最初に受講した近世文学での興味深い話の数々は『庶民の文化』（昭和42年・富士新書）執筆における余滴だった。

田中ゼミでの、版本挿絵に見られる「鎌と輪印と平仮名『ぬ』」という図柄の話題や、「うだつ」「すりきり」「九相詩と九相図」の話、『竹斎』『可笑記』『二人比丘尼』『御伽婢子』『恨の介』『浮雲物語』『浮世物語』や『嶋原集』『讃嘲記時之太鼓』『色道大鏡』などの知識は、『近世文学資料類従（仮名草子編10）二人比丘尼・七人比丘尼』（昭和48年、勉誠社）、『可笑記大成』（昭和49年、田中伸・深沢秋男・小川武彦共編、笠間書院）、『仮名草子の研究』（昭和49年、桜楓社）を矢継ぎ早に研究書を刊行される中での精髄だった。ご無理が重なったのか、その頃から入院と療養が繰り返されるようになった。仕事にも学問にも意欲的に取り組まれ、満帆に見えていた矢先だった。

先生の悔しさは如何ばかりだったろう。

田中ゼミの授業風景（昭和50年5月）

病を癒やし大学に復帰された先生だが、体調管理を優先されざるを得なかった。

博士課程3年目に『近世文学資料類従（仮名草子編33・34）為愚癡物語（上・下）』（昭和52年、勉誠社）が出された。先生はこの本を共著とされ、お名前の脇に私の名を並べてくださった。私はまだその重さも先生のお気持ちも忖度できぬ未熟者だった。非常勤講師として3年勤めた京華高等学校に専任教諭としての採用が決まり、ご報告に伺うと「良かった、おめでとう」と嬉しく祝ってくださった。

昭和53年春のことである。

その後、『近世小説論攷』（昭和60年、桜楓社）を刊行されたが、平成2年秋には奥様に先立たれ、すっかり気落ちされたご様子だった。「つらいなー」と漏らされた声が痛々しかった。翌平成3年2月8日、先生は奥様の後を追って天に召された。

71才だった。

通夜の帰り道、「もう師匠がいない」事実が胸に迫った。

みまかられて24年、現役で勤務を続けられているのも、先生から享けた学恩が大きい。多謝。

（啓明学園中学校高等学校 校長）

貴志正造先生の思い出

慈幸正法（文48）

もうそろそろ還暦を迎える年齢になりましたが、貴志正造先生との出会いは私にとって運命的でありました。

当時、二松は一般入試でも面接があり、そこで貴志先生から試問を受けたことに始まります。高校時代から『平家物語』を愛読していた私に、陽の光が射すように目の前に出現したのでした。そのうえ先生は私と同郷の人でもあったのです。

入学後、親しく声を掛けて下さり、1年生なのに課外の『無名抄』の輪読会の聴講、研究室への出入りも許され、貴志ゼミとのつながりは実に四年間に及びます。そんなわけですから、ゼミ選択も迷うはずもなく、初めから定まっていたかのように進みました。

当時、学生の間で、かなり厳しいと評判のゼミで、調べが不十分な状態など許されず、1週間はゼミの終わりで始まるほどで、時には国会図書館に論文を読みに日参したりと、準備はたいへんでしたが、それなりの緊張感があり、書物に埋れた充実した毎日でした。何よりもそこで身につけた学問に対する準備の徹底さは、その後の教員生活でどれほど役に立ったか測り知れないほどです。もう一つ、先生から教わった古本選びの極意は、後40年磨き続け、現在、病膏盲の域に達していると自覚しております。貴志ゼミは私たち9期、8名のあと、10期生の途中で夏に先生が亡くなってしまわれたので、実際、卒業までご指導いただいたのは私たちが最後になります。

研究室での貴志ゼミ（昭和50年）

しかし、貴志ゼミの伝統の灯は先輩でいらっしゃる磯水絵先生により脈々と受け継がれていることは、ゼミ生としての誇りであり、嬉しいかぎりです。

ゼミでの切磋琢磨をはじめ、錚々たる先生方のご指導を受け、鍛えていただき身に付けた自信のほどは、どこに出ても揺らぐものではなく、二松の〝学恩〟は一日たりとも忘れたことなく、感謝して日々過ごしております。

「文化講演会」雑記

峯岸英雄（文48）

浦野匡彦理事長・学長の急逝後、学長に就任した佐古純一郎は、二松學舍の鎖国的な学風改善と、一般知名度向上の一環として、昭和62年から、各地での文化講演会を企画した。当時、企画調査室に勤務し、学長秘書も務めていた私は、小林公雄室長の指揮下、各協力関係機関との交渉や運営に従事していた。

平成元年11月12日　水戸市教育会館大ホールでの講演会。講演は遠藤周作氏。

クリスチャンでもあった佐古は、全国で文芸評論や宗教啓蒙の講演行脚を為す「講演の達人」であり、ノウハウを熟知していた。おそらく、浦野体制下の教授時代から文化講演会の構想を抱いていたと思われる。

皮切りは、佐古の故郷・徳島で行われ、以降、岡山、酒田、水戸で開催された。酒田のみ佐古の単独講演で、徳島、水戸では佐古の講演と、佐古とは文学界の旧知の仲であった「海と毒薬」「沈黙」で知られた芥川賞作家、遠藤周作の講演も行われた。(岡山では、佐古の講演に加え、岡山出身の二松學舍専門学校卒業生で書道家・大館桂堂の講演が行われた)各会場、満員盛況であった。

運営にあたっては開催地区の教育委員会、地元新聞社(「徳島新聞」「山陽新聞」「荘内日報」「茨城新聞」)の協力もさることながら、松苓会支部の全面的協力が大きな支えとなった。(岡山では小山正敬氏、尾島恒夫・由美夫妻。酒田では齋藤裕氏の絶大なる支援を特記しておきたい)第一回の徳島での反響は大きく、開催要請が各地の松苓会支部から寄せられた。

双方向メディア発信時代の今日から見れば「文化講演会」はアナログ的な発想形式ではあるが、同窓会組織の盤石化と知名度向上、大学の社会貢献を兼ねた活動として再考していいのではないか。

(有)エム・コーポレーション代表取締役)

半田公平先生の思い出

沢　隆彦(文51)

私が在学しておりましたのは、かれこれ40年近く前の事で、お教えを受けた先生方は当然の事ながら既に現役を退かれております。

松苓会から定期的にお届け戴く会報に、お世話になった先生方や事務局の皆様のお名前や、お元気そうな写真が掲載されておりますと、大変懐しく、幸せな気持ちで満たされます。

けれども、そこに恩師半田公平先生のお名前やお姿を見つける事はできません。その現実は、私を深くて寂しい谷底に突き落とします。齢を重ねるごとにその感覚が強くなりますのは、老齢に近づきつつある自分自身の行く先に一抹の心細さを感じるようになったからでしょうか。

先生との思い出は、3年生の時、中世和歌文学ゼミに所属させて戴いた時に始まります。「文学を専攻するなら二松學舍へ行け」という父の強い勧めと、他を圧する豊富な講座に惹かれて、この大学なら何か面白い勉強ができそうだという一心で進学した私にとって、「六百番歌合の判詞の研究」という未知の世界はこの上なく魅力的で、迷う事なく受講を御許可下さるよう申し出たのでした。

寂蓮法師研究の第一人者として重きをなしておられた先生に、基礎から辛抱強く手ほどきをして戴きました事は、現在に至るまで私の大きな誇りであるとともに、感謝の念は筆舌に尽くし難いものがあります。

半田先生の授業風景(昭和50年)

春と秋にはゼミ生全員を国立公文書館の特別展にお連れ下さる等、実物の資料に触れる貴重な機会を事あるごとに設けて戴きました。清廉で誠実なお人柄から、先生をお慕いする学生も少なくありませんでしたが、時にお茶目な一面を見せて下さる事がありました。

享年70歳。御命日は奇しくも二松創立の10月10日。まだまだお健やかでいて戴きたかったという思いは年々募るばかりです。

映画館が小説の学校だった

志賀　泉(文51)

私の故郷は福島県南相馬市小高区(旧小高町)。埴谷雄高と島尾敏雄の本籍地として、戦後文学にゆかりの深い町である。この町が、東日本大震災の津波により甚大な被害を受けたばかりか、原発事故による放射能汚染で避難地域に指定され、五年もの間、無人の町になっていた。原発事故という極めて政治的な失敗により現出した無人の町は、同時に極めて非現実的な空間でもあった。埴谷雄高と島尾敏雄という、共に幻視者の資質を持つ二人の作家の共通の故郷が「政治的且つ非現実的」空間を開いたのは何かの因縁だろうか。そして、この地で生まれ育ち作家となった私は何をするべきか、震災以来絶えず自問してきた。

文学者有志を被災地に案内したり、エッセイやルポタージュ等の文筆活動もしてきたが、私にとって挑戦だったのは「原発被災地になった故郷への旅」という記録映画に出演し、全国各地で上映＋講演会を催してきたことである。（この映画は「映文連アワード２０１４」で部門賞と特別賞をいただいた）

映画の持つ影響力を知ったのは大学時代である。上京間もない頃に池袋の文芸座で「ドクトル・ジバゴ」を観て以来、私の頭の中では小説と映画の両輪が絶えず回転していた。映画館はある意味で「小説の学校」でもあった。記録映画の自主上映会にもよく出かけた。そんな学生生活が今の自分を作り上げている。

ＤＶＤもビデオもなかった時代だが、代わりに名画座は至る所にあり、古今東西の名画を観る機会はふんだんにあった。剣道部の稽古でくたくたになりながらも、観たい映画があれば少々の距離は厭わなかった。コンパの後でも酔った頭でオールナイト上映を朝まで観ていた。かつて有楽町線飯田橋駅の上にあった「佳作座」には、授業の合い間によく入っていた。文芸物を上映することが多かったので大好きな名画座だった。

出会いに感謝して

江村春彦（文57）

平成元年3月に大学を卒業し、翌年4月より長野日本大学高等学校に勤務しました。平成25年からは2回目の中高一貫生の担任とともに中学の教頭職を兼務しております（平成16年に中学校開校）。

清水義昭先生と清水ゼミの仲間たち

さて、私は昭和60年に入学し、1・2年次は沼南校舎（現柏校舎）、3・4年次は千代田校舎へ通いました。長野県の豪雪地帯である飯山市の田舎から、世間を知らず、知り合いもおらず、心構えや志の薄いままに、親元を離れての大学生活を柏市でスタートさせました。新聞店に住み込みで新聞配達をしていましたので、とても忙しく、眠い毎日だった記憶があります。慣れない大学生活に不安をかかえている毎日でしたが、いつも心配して声をかけてくださったのが、教学部の髙柳幸雄さん（現附属図書館事務部長）でした。もちろん私だけではなく、学生全般の心配をされていたのだと思いますが、入学間もない段階から名前を呼んでいただいた嬉しさを今も覚えています。卒業後も、たびたび大学にお邪魔し、現在もお付き合いをさせていただいています。

千代田校舎に通う3年次からは、清水義昭先生（元学長）の国語学ゼミを選択しました。2年次に国文法演習という授業を受講し、言動やスーツの着こなし、眼鏡、腕時計からの上品な雰囲気、そして笑顔には大らかにすべてを包み込むような大きな人柄を感じたからでした。一種の憧れのようなものだったかもしれません。ただ先生の授業の評価は非常に厳しいことが有名で、授業についていけるかどうかということだけが心配でした。清水先生には、本当にできの悪い私のような者をこれ以上ないというぐらいに温かく見守っていただきました。厳しいのは先生そのものではなく、先生の学問に対する姿勢であったことに気付きました。ゼミの仲間は、卒業後も何かと連絡をくれ、気にかけてくれました。それぞれの結婚式に行き来したり、私がクラブの合宿で生徒を引率して近くまで行けば生徒に差し入れをしてくれたり、今回もこの文章のために、仕事が忙しいにもかかわらず、快くすぐに写真を探してくれました。清水先生と12名（後に1名加入）の仲間との出会い、そして2年間のゼミの活動は、大学生活そのものであり、卒業以降も心の支えであったように思います。現在の私があるのも、先生とゼミの仲間たちのお陰であると心より感謝しています。

卒業後も松苓会の支部活動に参加させていただいたことにより、多くの同窓の方との出会いがありました。そこから、学び、励まされ、癒され、同窓という見えない糸に温かなつながりを感じています。

（平成28年1月・大学の卒業アルバムをめくりながら）

中田勝先生の思い出

西園隆士（文59）

昭和62年4月に二松學舍大学文学部中国文学科に入学した私は、平成元年に3年次生となり、中田勝先生が御担当されるゼミナールを履修しました。

学生時代、クラブ活動に明け暮れていた私は、勉強らしい勉強などほとんどしてきませんでしたが、中田ゼミでは、自分なりに多少勉強らしいことをした記憶が辛うじて残っています。

中田先生と聞いて真っ先に心に浮かぶことは、先生のお人柄です。とても温厚なお人柄で、柔和な笑顔がとても印象的な先生でした。どんな時でも穏やかな口調でお話しされ、何かにつけ破顔一笑されていた先生は、「とても優しいおじいちゃん」という表現がぴったり当てはまる方で、失礼な言い方になるかも知れませんが、今風にいえば正に「カワイイ」という表現になるのでしょう。

中田　勝先生（卒業アルバムから）

また、先生は煙草がお好きで、オレンジのパッケージのエコーという銘柄を好んで吸っておられました。当時は喫煙者であった私は外国銘柄の煙草を吸っていて、中田先生はゼミのコンパの席等で、「外国煙草を吸ってるなんてハイカラだなぁ。先生にも洋もくとやらを吸わせてよ。」などと仰り、先生の煙草と私の煙草とを良く交換していたことを思い出します。

さて、そんな温厚な印象が強い中田先生は、普段、怒ることなどほとんどありませんでしたが、ただ一度だけ声を荒げられて学生を叱った場面を目にしたことを、今でも鮮明に覚えています。その授業科目名は忘れてしまいましたが、授業の出席を確認するための出席カードを配付していた時のことです。カードを受け取ると、記名したカードを友人に預け、中田先生の目を盗んでこっそり教室を退室した学生がいました。それにお気付きになった先生は、教室の引き戸をガラッと開けて廊下へ飛び出し、授業をさぼろうと教室を後にしたその学生に向けて「そこに居直れ！」と激昂されました。そして廊下でその学生を諭した後は、いつもの温厚な先生に戻って何事もなかったかのように授業を続けられました。

その時、中田先生は温厚なだけでなく、「勉学には真摯な態度で臨みなさい。不正なことなど許さない。」という、とても強い信念を持って我々の教育に当たっておられたんだということに、改めて感じ入りました。

そんな中田先生は、平成27年3月11日に逝去されました。私が若きに日に先生から施していただいた恩恵に感謝しつつ、中田先生の御冥福をお祈りいたします。

今西幹一先生の短歌

吉澤慎吾（文60）

ありし日の今西先生

一つの愛美しくせむためわたくしが殉ぜしものに夜の桜散る

春になると思い出す、のではなく、春でなくとも思い出す、先生の学生の頃の歌。先生の大学4年の時の、角川「短歌」大学生特集に掲載された「無名の詩」十首の劈頭を飾る歌。先生の歌に批評など加えたくはないので、ここでは、ただ、私が一番好きな歌だとだけ言っておく（昔日に出席していた二松短歌会では先生の歌にもかなり好き勝手なことを言っていたような気もするが）。先生は、研究のみならず実作もされる方であった。その「短歌史」にも関わった実作活動は、「大学院進学の未練を断つため、生涯一教師として生きようと思い」（最終講義）、一時断念、再開はだいぶ後のこととなる。

背後より陽は昇るゆゑ富士の山
黒々として全容を立つ

朝あさに冷え勝りゆくに甲斐の山
なほ彩づくあり眠りに入るあり

紫陽花の藍の鞠花ひとところ咲き
固まれる九段坂行く

右三首は、先生の「お別れの会」で配布されたカードに刷られていた歌で、関西人の先生が、山梨に移られ、また、そこから本学に勤められるようになってからのものである。

先生の研究は、書店でもオンラインショップでも（もちろん本学の図書館でも）容易に求めて得ることが出来る。が、歌の方はなかなかそうはいかないのが残念である。学外に於いて、先生の歌を求めて最も得られやすきは、先生を私かにライバル視していたとも見える岸上大作（国学院短歌の自裁夭逝した学生歌人で先の「短歌」にも二段組十首で歌が掲載されている。先生は一頁十首）の現代歌人文庫『岸上大作歌集』中の評論・日記くらいなのである。そういう由で、この機会に、私の余りにも私的な先生との思い出話を披露するよりはと、このような文章を書

くことにした。

乾一夫先生の思い出

黒川　淳（文60）

7月2日、この日は私の誕生日。重ねて、乾一夫先生の誕生日でもある。毎年、6月も下旬にさしかかる頃になると、先生も同じ誕生日だったな、と色々な思いに浸る自分がいる。

3月25日、平成27年。

この日は松山東高校と二松學舎大学附属高校が、大きな舞台で熱戦を繰り広げた日でもある。毎年、この日は朝から先生のご尊顔を思い浮べ、頭を下げる自分がいる。平成4年、最後に先生にお会いし、楽しく会話をはずませ、乾節を時の経つのも忘れるくらいの中、伺った謝恩会の日。この1年後、先生は帰らぬ人となってしまわれた。

「ものは比較しなきゃ、だめなんだ。視野を拡げ、普遍的なものの見方をする眼を養っておかなければならないよ、お前たち。」その後には語りかける口調で、「わかるか。」が添えられていた。抑揚ある、愛情に満ちあふれた温かい言葉のシャワーをいっぱいあびせていただいた。

「学ぶは真似ぶなんだ。」そうも言っておられた。ゼミ長という立場をちょっと利用したか（笑）、先生が来室される前に、出席をとった。胸ポケットから青ボールペンを一本取り出し、「アベ……。」調子にのった私は全員分の出欠を確認した。それくらいに遅れて入ってこられたが、お昼は会議で忙しく、疲れておられた。お弁当もすぐに口に入れられて頬ばれるものにしていたのよ、と後で奥様から伺った。

大学3年次の乾ゼミ納会

平成5年の正月、私が上京するのを楽しみに待っておられたことも、棺のそばで静かに言われた声も忘れられない。

以前勤務していた高校の図書館の本棚にも『唐代伝奇』とともに『孟子精釈』があった。生前いつだったか、「K先生が80点だったのを、100点にした。」と笑っておられた。話はいつも面白かった先生。

「頭の鏡はみがかにゃならん。」この言葉、うれしそうに言っておられました。

二松學舎大学「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」の紹介

町　泉寿郎（文60）

本学では2015年度から2019年度までの5年間にわたって、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択され、「近代日本の「知」の形成と漢学」という研究プロジェクトを推進することとなった。

21世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」（2004～2008年度）終了のち数年が経過し、佐藤進教授の定年後、筆者が東アジア学術総合研究所の日本漢文教育研究推進室長を拝命することとなって、法人側・大学側から再度、「日本漢学」研究に関する外部資金獲得を期待されることとなった。

今回のプロジェクトに言う「漢学」は、広く漢文による学習の意味である。一般に「漢学」は19世紀を通して「洋学」に席を譲って衰退したと考えられがちであるが、実は近代教育制度の整備とともに、学術面では中国学・東洋学に脱皮し、教学面では「漢文」が「国語」と並んで言語と道徳に関する教学として再編されて浸透したと言える。更には、この学術・教学体制が東アジアを中心にした諸国にも影響を及ぼした。したがって、「漢学」が学術と教学に解体・再編された過程を、経時的、多角的に考察することにより、「漢学」から日本、および東アジアの近代化の特色や問題点を探りたいと考えたのである。

現在、研究組織としては、学術研究班、教学研究班、近代文学研究班、東アジア研究班の4班に17人が所属し、その他に学内外に連携研究者を依頼している。事務局を4号館9階の東アジア学術総合研究所内に置き、研究員・研究協力員・助手も採用している。

実施計画としては、「1国際的な研究ネットワークによる日本漢学研究の推進」として国内外機関との研究連携、国際会議・シンポジウム・共同研究、国内・海外調査等を実施する。「2日本漢学に関する各種の情報発信」として、近世近代の日本漢学資料を中心とした各種データベースを拡充し、各種研究成果を刊行する。「3日本漢学分野の研究者養成」として、国内外の日本漢学分野の研究者

の研究支援に関する各種事業を行う。

ご支援・ご鞭撻を心からお願い申し上げる。

（文学部教授）

国際政治経済学部創設の頃

中山政義

国際政治経済学部は、1991年に開設され、今年でちょうど25年目となる。開設当時の国際社会は、1990年に東西ドイツの再統一が行われるなど、激動の時期を迎えていた。そのような時代の要請にこたえるべく開設された本学部は、異種の学問からなる融合学部ゆえに、その教育スタッフも独特な個性の集合体としてスタートした。

初代学部長 本橋渥先生

本橋渥先生（学部設置準備室長）は、「われら、新しき世界に草の根となりて」という表題で、新学部の目的を語っていた。国際人とは、ただ外国のことを知っているとか、外国語ができるというのではなくて、相手の文化的伝統の違いを認めながら、お互いに助け合うという草の根的で人間的な信頼を築ける人間であってほしい。そういう人々が出て初めて、真の平和とか友好というものが国と国、民族と民族の間に生まれる。インターナショナル・インタレストという視点で物を見るという習慣が日本人には育っていなかったので、これからは、その面を伸ばしていかなくては真の国際化はできないと言うのである。

このような壮大な教育理念を実現するために、当時の教育スタッフには、情熱あふれる教授陣が各界から揃えられた。横浜国立大学経済学部長であった本橋渥先生を中心に、早稲田大学から政経学部長を務められた伊達邦春先生、慶応義塾大学から国際法の権威として知られた中村洸先生、社会政策の飯田鼎先生、経済政策の常盤政治先生など著名な学者が集まった。また、実践的な教育を目指す学部であるために実務家教員も多く、読売新聞論説委員を務められた多田實先生、日本銀行から金融論の酒井英男先生、三井物産法務部から柴山真吾先生など多彩な顔触れであった。

国際政治経済学部は、新しい学問領域の形成を意図する学部として創設されたので、教員組織も既存の枠組みにとらわれない専門家集団として、とても自由な雰囲気を持っていたのである。当時、国際社会の問題について、同僚教員が意見を述べるのを聞いて、その発想や分析の違いに驚くことも多かったが、非常に新鮮に感じたものだった。

本学部で教育を受け、社会へと巣立って行った卒業生は5000名を超えるが、国際的な職業に就く者も多く、国連職員となった者、NGOの活動に加わり世界中を飛び回っている者、海外でホテル事業を展開する者など様々な分野で活躍を見せている。「草の根的で人間的な信頼を築ける人間」の育成に向け、学部は今後も発展を続けていくことだろう。

（国際政治経済学部長）

国際政治経済学部平成7年度入学式（沼南校舎で）

国際政治経済学部に学んで

濱野　学（政1）

学校の勉強は「キライ」でした。生意気だった自分は、誰かから何かを教わることも、誰かに教えを乞うことも好まない、そんな子供でした。そのような自分でも、縁あって様々な場で様々な人と出会うことができました。

中学3年生。将来に悩み、漠然とした不安を抱えていた頃、担任であった恩師は、私達にこう語りました。

「皆、名のある学校に行きたがるが、どこの学校に行くのかが重要なのではなく、そこで何を学ぶのかが大事なのだ」と。

高校3年生。周りが皆、自分の進路に思い悩んだ頃、「まぁ大学に行けたらイイナ」という軽い気持ちだった自分に、担任であった恩師はこう言いました。

「あなたみたいな世捨て人が浪人なんかしたら、益々落ち零れていって、そのまま野垂れ死ぬわよ！」と。（笑）

行く末定かでない中で、運よく新しくできた二松學舍大学国際政治経済学部に入学することができました。

大学生。『経済学』の授業で「社会科学には、かくあらねばならないという道義論は必要ない」と教

わった先生、『政治学』の授業で「現実の政治はダイナミック（動的）なもの」と教わった先生、『憲法』の授業で「信教の自由とは宗教を信じない自由でもある」と教わった先生、『国際関係』の授業で「本来、母国語という言葉はありません。英語でmother tongueというとおり、『母語』が正しい」と教わった先生。

何かをやりたくて、何かを学びたくて、進むべき道を進んできた訳ではありません。ただ、出会う時に出会うべき人と出会い、その中で生きて来たのかもしれません。

あれから幾星霜、教えを乞うことがキライだった自分が多くの人に教えられ、学校嫌いだった自分が、今、二松學舍大学教務課で働いています。

山崎正之先生の思い出

小沢洋之（文64）

私の代（64回卒）のゼミは32人という大所帯だったが、ゼミが取り扱う「上代文学」を学びたい、というよりは先生の個性に惹かれて集まった者が多かったような気がする。たぶんその中には1・2年次で先生の「日本文学史」を受講した者が多かったはずだ。

先生の守備範囲の広さ（『源氏物語』をこよなく愛しつつも学生時代は近代文学に傾倒し、研究者としては記紀神話が専門で、柳田・折口民俗学への造詣も深い）は、まさに文学史という授業にうってつけで、上代から近現代まで縦横無尽に語るこの授業によって、日本文学の連綿性（文学伝統という言葉を先生は使った）を、学生はごく自然に学ぶことができたのだ。

そして、先生の風貌がまたとりわけ魅力的だった。

山崎正之先生（昭和63年入学案内より）

短躯で大きな白髪頭はどことなくユーモラスで、口から飛び出す神田っ子らしいべらんめえ調と、がははという明るく豪快な笑い声。断言してしまうが、そんな先生に好感を抱かない者など1人もいなかった筈だ。

とにかく、そうやって先生に魅力を感じて集まったゼミで、私たちは存分に学んだ。かつて武者小路実篤がトルストイに熱中した揚句「ト」の字を見ただけで体が震えたというのになぞらえて、「あんたたちも古事記のコと聞いただけで震えるくらいになんなさい」というのが先生の口癖だった。残念ながら私はそこまでには至らなかったのだが。（もしかしたら、同期の友人達はその境地に到達したかもしれない？）

テキストは岩波文庫の『古事記』。他にも日本書紀・風土記・万葉集、はては中国の神話まで幅広い文献を扱った。文献の時代特性として「クソマル」だの「マグワフ」だのといった魅惑的な尾籠語が頻出するのだが、先生は真面目に解説を加えた後でテキストをパタンと置き、必ず「汚ねぇー話だなァ」とちょっと嬉しそうに独特の調子で締めるのがいつものことで、学生達にはそれが楽しみでもあった。

ゼミ生たちの発表は、今思えば至らぬ発表ばかりに違いなかったが、先生は優しく見守ってくださった。本当は厳しいところもある先生なのだが、学生達にはそれを求めず、とかく指図もしなかった。学生たちの自発的な気づきを待つような、そんな様子だった。ただひたすらにやさしい先生であられた。

先生が鬼籍に入られてはや14年。私は縁あって二松學舍に就職した。改築されて明るく綺麗になった校舎が今の職場だ。

考えてみれば、すでに学生時代の何倍もの時間を職員として過ごしているのに、何かの拍子に「二松學舍」と耳にして真っ先に思い浮かんでくるのは、どういうわけか長く馴染んだ職場の風景ではなく、あの古い校舎の狭い演習室と、目を輝かせているゼミ生たちと、その輪の中にいる先生の温かい眼差しだ。

たぶんこれからも、ずっとそうであり続けるような気がする。

笑顔の人、恩師中村宏先生

小皆啓子（文64）

中村先生、先生が旅立ってから早いもので14年の歳月が流れています。会社員だった私が、今は教員として教壇に立っています。先生、人生って面白いものですね。

教授という立場の先生にどう接していいかわからなかった私は、「いつも素敵なシャツですね。」とドキドキしながら話しかけました。マオカラーの、ダンディな化繊のシャツ。ネクタイをあまり締めていらっしゃらなかった。

「義弟のデザインなんだよ。」

と嬉しそうに答えて下さいまし

たね。義弟の方は私でも知っている世界的な一流デザイナーで、声を上げて驚いた記憶があります。

ある時、評論家上総英郎について伺いました。

「僕はね、遠藤さんの『沈黙』を批判したんだ。コテンパンにやっつけたのに、気に入られちゃったんだよ。君の言葉は切れ味の鋭い刀で、ここまで切られたら気持ちがいい、爽快な感じがするってね。」

ご褒美をもらった子供のように、楽しそうに少し照れながら話して下さいました。先生の表情から、遠藤周作氏との関係性や批判精神からなる先生の生き様のようなものを感じ取りました。

卒業ゼミ旅行　奈良飛鳥路を探訪

森鷗外の『雁』をゼミで演習した際、お玉の台詞「お父さん」を、私が「おとっつぁん」と朗読した時です。

「君は演劇部だったのかい？」

ニコニコしながら仰いました。後年、先生が教員時代演劇指導もされ、歌舞伎に精通していらっしゃったことも知りました。「奈落」の語源は先生が教えて下さったのでしたね。

先生、私は後悔していることがあります。もっとたくさんのことを先生に伺えば良かった。不躾な学生だと思われても、若さにまかせて臆せず先生と語らえば良かった。文学、古典芸能、先生の故郷ヒロシマ……。

今、先生の遺された著作を通して、私は先生と語らうことができます。先生の真摯な教育論を拝見すると、恩師ではなく、同志のような気持ちにさえなるのです。

「心に太陽を、唇に歌を」――卒業記念のグレーのアドレス帳に、ゼミ生全員に先生が記して下さった言葉です。その言葉の力強さと奥深さを改めて噛みしめています。

中村先生の笑顔を想い出しながら……。

沼南祭のこと

山﨑真之（政4）

松苓会から「母校の思い出」（沼南祭や近況等）についての原稿を求められました。未だ四十となったばかりの若輩が「思い出」を寄せることは、伝統ある本会の会報を汚すことになるのではとの躊躇いを覚えましたが、「四十にして惑わず」、あるいは「青年の老年期」という節目でのご依頼と思い、稿を起こすこととしました。

まずはご依頼文にあった「沼南祭」についてですが、3人の子ども達が容赦のない日々の中で、さてひとり、机に向かっていざ筆を執ろうと思いましても当時の正確な記憶を辿ることは困難でした。そこで学生会執行部として苦楽を共にした橋本浩（政経5回卒、以下同様）、平岡賢治郎、鶴田（大野）砂織、坂田（安藤）文香、岡崎（青木）絹予、中島綾子、照木美智子らに当時の資料提供をお願いしたところ、後日、思いのほか多くの関連資料が拙宅に集まりました。

以下では、お預かりした資料に依りながら当時の記録を少しく紹介してみたいと思います。

沼南祭の構想自体は平成8年度中に企画したもので、当時、沼南学生課におられた井上和男さんや小西明徳さんらのご教導等もあって、その実施は平成9年度の学年暦上に初めて具現化しました。そして第1回沼南祭は同年6月29日に開催され、その日の朝刊では、数社の新聞紙面に本学園祭の記事を掲載して頂きました。

地域と学生の交流に
「沼南町大井の二松學舍大学で…
初の学園祭「沼南祭」が開かれる。
…山崎真之さん（4年生）は「自分を含め、ふだんは地域と無縁で学生生活を送っている学生がほとんど。学園祭を学生が地域と交流を深めるきっかけにしたい」と話す。

今般手元に届いた資料群の内、『千葉日報』が報じた記事には、「沼南町大井の二松學舍大学で…初の学園祭「沼南祭」が開かれる。…山崎真之さん（4年生）は「自分を含め、ふだんは地域と無縁で学生生活を送っている学生がほとんど。学園祭を学生が地域と交流を深めるきっかけにしたい」と話す。このため、町内の関係機関にも幅広くアプローチ。町や町教委、町商工会の後援を得た」とあり、別資料では当日、2千名以上の来客があったことも報告されておりました。この度の執筆を機に目にした思い出の資料群は、二松學舍でのピュアな青春の記憶を私に蘇らせると共に、恩師・長谷川日出世先生（憲法学）が語られた「学生時代は理念に生きよ」という言葉を想起させるものでした。

沼南祭実行委員の仲間たち

末筆に近況を記しますと、私は幸運にも五十前に大学での専任職を得て、現在、川越市のキャンパスで教職を目指す学生達に教育学を講じております。とりわけ、今日のわが国教育改革の柱の一つが、目下、「学校と地域の連携・協働」にあることを彼らに語る授業では、非常に熱が入る日々を過ごしております。

湯島仮校舎のことなど

神田邦彦（文71）

原稿を依頼されて言うのもなんですが、昔を振り返ることはあまり好きではありません。好きではないというか、単純に振り返ることをしないのです。旅行へ出かけても、記念に写真を撮ることはしません。

あとで振り返らないからです。

わたしは1999年に入学しましたから、学部の2年生から博士前期課程の2年生までの5年間で5度通う校舎が変わった稀有な世代ということになります。あのころ、1・2年は柏校舎（当時は沼南校舎）で学び、3・4年は九段で学ぶことになっていて、3年に進級して1年間は九段の旧校舎で過ごしました。

図書館がとても使いやすかったのが印象的で、雑誌も開架されていて、ほんとうによい図書館でした。

ところが、校舎を建て替えるというので、4年は柏に戻ることになりました。

卒業後すぐに大学院へ通うようになると、院の授業は湯島聖堂を間借りして行われており、湯島聖堂の庭に建てられた仮設のプレハブ小屋が国文・中文の共同研究室兼院生室でした。図書館は柏まで行かなければなりませんでしたが、この湯島時代こそ、もっとも楽しい時間でした。

院の前期課程というのもありましたが、場所が湯島聖堂で、御茶の水駅に近いというだけで、なぜか心は踊ったように思います。国文・中文の研究室がひとつの小屋の中にあり、院生室を兼ねていたというのは、院生や助手さんとの交流を生み、互いの情報交換を活発にし、先輩・後輩の隔てなく、いろいろと議論を交わしたことでした。前期課程の2年になり、いまの九段校舎へと移りました。

当時のことは、いまと状況が違いますから、比較はできませんが、狭い仮校舎ながら、互いに協力し合い、研究に邁進していました……これだから嫌なんです。昔を振り返ると、つい「昔はよかった」と言ってしまいそうになるから。ほんとうはそんなことはないと思うのですが。

松苓会員の皆様へ（お願い）

松苓会では、会員名簿の整備に努めております。住所が変更しましたら、本部への連絡をお願いします。

メール、はがき、電話等でお知らせください。裏表紙のＱＲコードも活用できます。あわせて、支部への連絡もお願いします。

松苓会報原稿募集

会員相互の交流、情報交換の場を提供するため、会員から原稿を募集しています。

内容は、会員の近況報告、母校や恩師の思い出、漢詩、短歌、俳句などの文芸作品。同期会、クラブＯＢ・ＯＧ会の情報など。

字数　800字程度まで。短信（50字位）でもかまいません。

締切　特に定めません。会報は年2回（10月、3月）発行しておりますので、適宜掲載します。

資料提供のお願い

松苓会では、継続して資料を収集しています。特に次の資料をお持ちの方は、ご一報ください。

・機関誌『松苓』創刊号、第5～8号
・松苓会名簿　昭和13年以降昭和30年代までに発行されたもの
・松苓会会則資料
・松苓会活動（本部）に関する資料、支部活動に関する資料（支部報など）、同期会、クラブ等のＯＢ会などの資料、写真、専門学校時代、昭和20年、30年代の写真、卒業アルバムなど

松苓会役員・支部長名簿

平成28年5月1日現在

役員	氏名	卒回
顧問	佐佐木　鍾三郎	専15
〃	雨　海　博　洋	専19
〃	末　吉　榮　三	専12
相談役	水　戸　英　則	理事長
〃	菅　原　淳　子	学長

本部役員（18名）事務局（1名）

会長	廣　田　克　己	文38
副会長	新　井　喜　義	文37
〃	山　崎　正　伸	文41
幹事長	小　林　公　雄	文38
常任幹事	小　林　憲　二	文38
〃	平　野　光　治	文40
〃	清　水　　登	文42
〃	大　山　由美子	文47
〃	神　河　秀　春	文47
〃	高　柳　幸　雄	文49
〃	菅　原　義　博	文53
〃	高　橋　映　子	文53
〃	志　村　　孝	文59
〃	西　園　隆　士	文59
〃	助　川　忠　弘	政3
〃	山　崎　真　之	政4
監事	畠　山　幸　治	文37
〃	木　村　誠　次	文39
事務局長	佐　藤　　修	文41

幹事（18名）

	氏名	卒回
北海道	北海道　山　崎　郁　紀	文36
東北	岩手　宮　本　義　孝	文32
関東	千葉　辻　　将　一	文45
中部	富山　小　島　貴　雄	文47
近畿	兵庫　武　内　昭　徳	文47
中国	広島　平　岡　才二郎	文26
四国	香川　大　西　邦　美	文40
九州	宮崎　宮　崎　宣　幸	文41
沖縄	沖縄　金　城　健　一	文38
	星　野　優　子	文42
	小　町　邦　明	文49
	大　渕　俊　明	文50
	山　口　洋　子	文54
	小　西　明　徳	文60
	町　　泉寿郎	文60
	中　原　敬　二	文62
	濱　野　　学	政1
	山　口　浩　司	政3

支部長

	氏名	卒回
北海道	増　井　義　昭	文39
青森	柴　垣　博　孝	文44
岩手	宮　本　義　孝	文32
宮城	千　葉　　仁	文27
秋田	三　浦　　基	文41
山形	齋　藤　　裕	文38
福島	北　村　　博	文32
茨城	沼　田　俊　明	文40
栃木	寺　内　　進	文49
群馬	小　石　さち子	文47
埼玉	町　田　哲　夫	文42
千葉	辻　　将　一	文45
東京	矢　澤　喜　成	文50
神奈川	平　野　光　治	文40
山梨	板　山　俊　介	文36
長野	関　　保　典	文35
新潟	坂　井　福　作	文42
富山	小　島　貴　雄	文47
石川	菅　野　成　也	文50
福井	中　道　佳　宏	文58
岐阜	竹　内　秀　人	文55
静岡	永　井　陵　次	文38
愛知	松　田　博　文	文55
三重	稲　垣　武　嗣	文33
滋賀	角　井　良　暢	文49
京都	廣　田　康　男	文54
大阪	齋　藤　　衛	文49
兵庫	武　内　昭　徳	文47
奈良	辻　　一	文39
和歌山	明　治　利　隆	文47
鳥取	小　谷　章　公	文38
島根	江　角　　仁	文39
岡山	永　瀬　　清	文39
広島	平　岡　才二郎	文26
山口	俵　田　賢　嗣	文40
徳島	大　倉　明　子	文47
香川	大　西　邦　美	文40
愛媛	上　田　善　達	文38
高知	坂　本　和　生	文37
福岡	永　淵　道　彦	文36
佐賀	吉　原　一　寛	文39
長崎	黒　瀬　孝志郎	文38
熊本	塩　永　英　文	文52
大分	甲　斐　啓一郎	文52
宮崎	宮　崎　宣　幸	文41
鹿児島	岡　元　正　昭	文31
沖縄	金　城　健　一	文38

編集後記

松苓会報特集号「松苓会創設85周年」をおとどけします。本年は松苓会創設85周年を迎え、記念式典や祝賀会が計画され、松苓会記念誌も初めて編纂されます。

松苓会85年の歴史をまとめた記念誌は会員全員への配布というわけにはまいりません。また、記念誌の性格上、85年の資料の収集に重きをおいたものです。その記念誌に比して、松苓会報の特集号は、会員全員への配布と、松苓会のこれまでの歩みを年譜としてまとめること、地方支部のあゆみや、母校の思い出に重点を置きました。執筆していただいた方々には、年末年始の多忙な折にご無理をお願いしました。お陰様で、母校のいろいろ、先生方の思い出のいろいろと、さまざまな記事が集まりました。

水戸英則理事長、菅原淳子学長、神津賢一郎前会長のご祝辞もいただいて、特集号としてまとめることが出来ました。ありがとうございます。

今後、広く母校の思い出、恩師の思い出、そして、懐かしい職員の方の思い出など、通常の会報へと繋げたいと考えています。引き続き、多くの皆様のご投稿をいただければと、願ってやみません。

二松學舍松苓会報 No.55 ー 特 集 号 ー

創　刊　昭和62年12月1日
発　行　平成28年6月12日
編　集　二松學舍松苓会

住　所　〒102-8336　東京都千代田区三番町6-16　二松學舍大学内
電　話　03-3261-7408
振替口座　00180-5-160343（郵便局払込取扱票）
印　刷　有限会社アドタック

二松學舍大学（松苓会）　ホームページ www.nishogakusha-u.ac.jp　松苓会E-mail shourei@nishogakusha-u.ac.jp